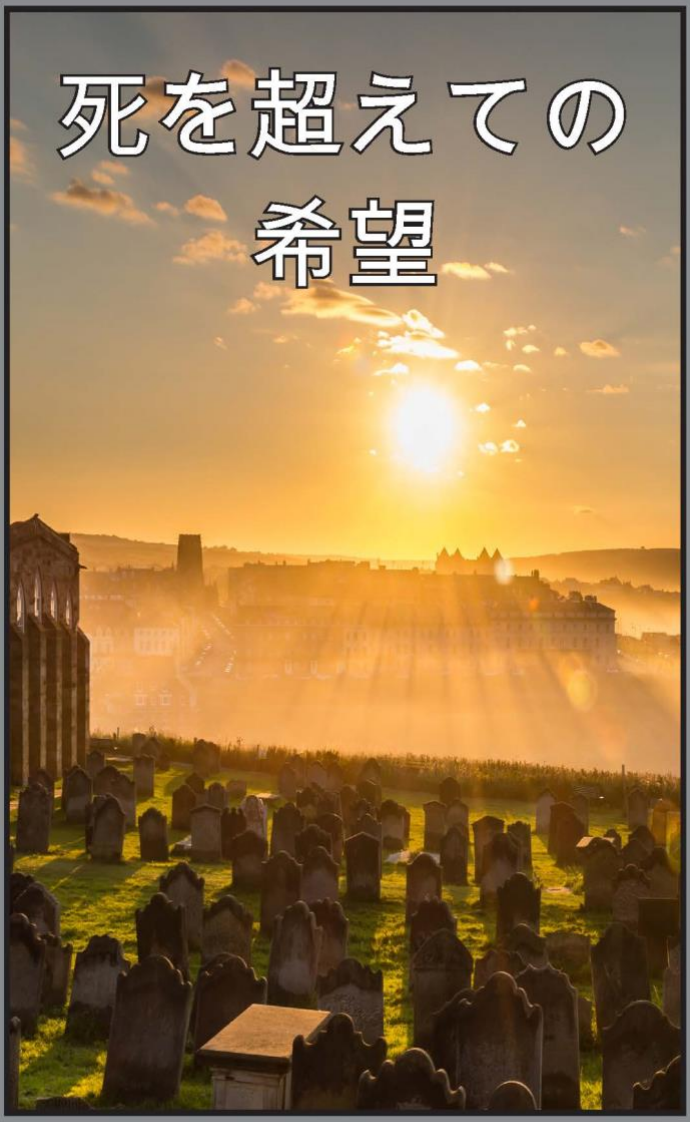

ja

死を超えての希望

第1章

死とは何か

死は人間にとって最大の敵です。そして、人間が入手できるあらゆる情報源の中で、この恐ろしい怪物に倒された人々の未来について、明確な情報を与えてくれるのは聖書だけです。 神の言葉は、「もはや死はなくなる」時が来ることを約束しており、さらに、死んだ者たちが再び生き返ることも約束している。（黙示録21:4；ヨハネ5:28,29）。死にゆく人類に対する創造主の備えを知ることは、愛する死者を悼む人々にとって、真の慰めとなるはずである。

死という恐ろしい幻影に加え、墓の向こうに何があるかという不確実性が、ほぼ普遍的に存在しています。 死の直後、その人には何が起こるのでしょうか。その人は、友人たちが集まってその死を悼んでいる間、何らかの神秘的な形で生き続け、葬儀場の周辺を漂っているのでしょうか。それとも、未知の「どこかにある美しい島」へと旅立ったのでしょうか。あるいは、もし故人がクリスチャンではなかった場合、今や伝統的な「罪人の領域」にいて、火と硫黄の地獄で永遠の苦しみを受ける運命にあるのでしょうか。

いくら努力しても、私たちはこれらの疑問を心から完全に追い払うことはできない。 そして、亡くな

った親しい友人や親族の多くは善良な人々であり、彼らが理解していたキリスト教を忠実に信じる者であったため、私たちの一般的な信仰によれば、今や天国で幸せに過ごしているはずだと考えることで、多少の慰めを得ている人も多いだろう。しかし、私たちには皆、正統的な信仰や慣習の枠外で亡くなった親しい友人や、おそらく親族も何人かいるはずであり、彼らの行方がどうなったのかと、つい考えてしまうのだ。 彼らは今、苦しんでいるのか、それとも幸せなのか？

科学には希望がない

科学は、死が訪れた際に人間の生命が継続するという証拠はないと告げている。現代は唯物論の時代であるため、多くの人々がこの見解を受け入れがちである。 主張によれば、生命の原理に関して言えば、人間は下等動物と何ら変わらない。人類のより高い知性は、人間が「魂」や「霊」と呼ばれる別の知性を内に秘めているという伝統的な理論によるものではなく、単に人間が動物界よりも優れ、より洗練された有機体を持っているという事実によるものである。

それでは、死者の現在の状態に関して科学が正しいことを明確に示している聖書の箇所をいくつか見てみよう。『伝道の書』9章5節にはこうある。「生ける者は、自分が死ぬことを知っている。しかし、死者は何も知らない。」『詩篇』49篇10～12節も的を射ている。「賢い者も、愚かで無知な者も、結局は死ななければならない。彼らはすべての 富を置き

去りにして。 墓こそが彼らの永遠の住まいであり、そこで彼らは永遠に留まる。彼らは自分の名で財産に名付けようとも、その名声は長くは続かない。彼らは、動物と同じように死ぬのだ。」

創世記2章7節には、「主なる神は地の塵で人を形造り、その鼻の穴に命の息を吹き込まれた。こうして人は生ける者となった」と記されている。その後、この元来完全であった夫婦が罪を犯した際、神はこう言われた。「あなたは額に汗を流して糧を得、土に帰るまで働かねばならない。あなたは土から取られたのだから。あなたは塵であり、塵に帰るのだ。」 （創世記3章19節）。詩篇146篇4節で、ダビデは塵に帰る者たちの状態について力強く宣言している。引用する。「彼らは息を引き取ると、地に帰る。彼らのすべての計画は、彼らと共に消え去る。」言葉に何らかの意味があるとするなら、これらの言葉が、死者を意識がなく、すべての思考が消滅した状態として描写しているという事実に疑いの余地はない。

詩人の次の言葉を改めて注目してほしい。「彼らは息を引き取ると、土に帰る。」もし人間が、意識ある生ける存在として、物質的な肉体と命の息の結合によって存在させられたのであれば、この二つの要素が分離した時に命が絶えるというのは理にかなっているように思われる。そして、まさにこれが本文が述べていることである。「彼らのすべての計画は彼らと共に死ぬ。」

「命の息」について疑問を抱く人もいるかもしれません。もしかすると、これは肉体が死んだ後も生き続ける何かではないかと考えるかもしれません。「魂」という主題については後ほど検討することにしよう しかし、ここでは、死の過程を描写し、神聖で創造的な知恵が組み合わせて人間の生命を生み出した二つの主要な要素が、まさにどうなるかを示している一節を検証してみよう。そこにはこう記されている。「そうすれば、塵は元あった土に帰り、霊はそれを与えた神のもとへ帰る。」伝道の書 12:7

この聖句を正しく理解する鍵は、肉体と霊の両方について用いられている「帰る」という言葉にあります。肉体は土に帰るとされています。これは、その構成要素がもともと土から来たものだからです。したがって、もし霊が神のもとへ帰るのなら、それは人間の肉体に入る前に、すでに神のもとにあったに違いないということになります。 もし、この意味での「神のもとにいる」ことが天国にいることを意味するならば、ここで言及されている「霊」が、霊的な天国での生活を享受できる意識ある存在であるならば、私たち一人ひとりが生まれる前にその霊的な天国にいたに違いないということになる。そうでなければ、私たちが死ぬときに「帰る」とは言えないからである。

「霊」の正体

ここで「霊」と訳されているヘブライ語は「*ルアハ*（ruach）」である。ヘブライ語とギリシャ語の著名な権威であるストロング教授によれば、このヘ

ブライ語「*ルアハ*」は「風」または「息」を意味するという。これは創世記7章15節で「息」と訳されているのと同じヘブライ語であり、そこでは下等な動物がこれを持っていると記されている。 引用します。「いのちの息（*ルアハ*）を持つすべての生き物のつがいが、ノアのもとに来て、箱舟に入った。」もし、人間のいのちの息や霊を表すために「*ルアハ*」という言葉が使われていること が、私たちの内に、肉体が死んでも生き続けるある種の知性ある実体が存在することを意味するならば、それはまた、下等な動物も本質的に、決して死ぬことのない同様の無形の何かを備えていることを意味することになる。

しかし、神の御言葉に沿って考えれば、すべてが明らかになります。創世記2章7節には、神が土の塵から人を造り、「その鼻の穴にいのちの息を吹き込まれた」と記されています。 肉体と命の息が結びついた結果、「人は生ける魂となった」とされています。明らかに、肉体が土に帰り、命の息、すなわち霊が、それを与えた神という本来の源へと戻るとき、その人は出生前の状態、すなわち存在しない状態へと戻ることになります。

この問題をさらに明確に解決するには、伝道の書3章19～21節に目を向けるだけでよい。そこでもヘブライ語の「*ルアハ（ruach）*」が用いられており、人間と獣の両方の息（*ルアハ*）は、死の際、同じ場所へ行くと言われている。 引用する。「人の子らに起こることは、獣にも起こる。彼らに起こること

は一つである。一方が死ぬように、他方も死ぬ。まことに、彼らにはみな一つの息［*ルアハ*］がある。それゆえ、人は獣より優れてはいない。すべては空しい。すべては一つの所へ行く。すべては塵から出て、すべては再び塵に帰る。 「人の霊が上へ（天へ）上り、獣の霊が下へ（地へ）下ることを、誰が知るだろうか？」

死に関する新約聖書の記述は、旧約聖書のそれとは完全に一致している。イエスは、死者は な無意識の状態にあり、それを眠りに例えている。 ヨハネによる福音書11章1節から46節には、イエスの親しい友であるラザロの病気、死、そして目覚めについて、驚くほど明快な記述がある。ラザロの姉妹であるマルタとマリアもまた、主の友であった。彼女たちの兄弟が病気になったとき、イエスがすぐに助けに来てくれるだろうと期待して、イエスに知らせを送った。

しかし、イエスは友であるラザロの病床に直ちに向かうのではなく、しばらく留まられました。しばらく時が経つと、イエスは弟子たちに言われました。「私たちの友ラザロは眠っている。しかし、私は彼を眠りから覚ますために行く。」弟子たちはこれを誤解し、イエスが自然な眠りのことを言っているのだと考えました。そこでイエスははっきりと、「ラザロは死んだ」と言われました。 その後、ラザロの墓の前で、イエスは大声でこの死者に語りかけ、「ラザロ、出て来なさい」と言われました。そして、「死んでいた者が出てきた」と記されています。

ここには、ラザロの「魂」が至福の天国にも、苦痛の地獄にもあったという示唆は一切ありません。記録によれば、彼は死の眠りについていたのです。そうです、イエスは「死の眠り」を信じておられたのです。

死の眠りからラザロがよみがえったという記述において、私たちは、墓の向こう側にある命に対する聖書の希望は、人間が本来不死であるという仮定にあるのではなく、死者の復活があるという確信にあるという事実を強調してきた。 使徒パウロもこれに全面的に同意している。コリント人への第一の手紙15章12～18節で、彼は、もし死者の復活がないならば、「キリストにあって眠りについた者たちは滅びてしまった」と結論づけている。

『ヨハネの黙示録』においても、死者の無意識の状態に関する同様の考え方が一貫して見られます。例えば、黙示録の著者は次のように述べています。「海はその中にいた死者を吐き出し、死と陰府も、その中にいた死者を吐き出した。」　（黙示録20章13節）。地獄に関する話題は後ほど検討することにする。ここでは、先ほど引用した聖句によれば、聖書における「地獄」にいる者たちは死者と宣言されているという事実を指摘しておけば十分である。これは、彼らが生きていて苦しみを受けているわけではないことを意味する。また、この聖句は、死者の希望が地獄から連れ出され、すなわち復活することにあることを明らかにしている。

要するに、「死者はどこにいるのか」という問いに対する答えは、彼らが現在は無意識の状態にあるということである。また、死後の生に対するすべての希望は、来るべき王国の時代に神なるキリストによって行使される偉大なる創造主の力強い御業を通じ、「義人も不義人も、死者の復活」があるという聖書の確約に集約されている。使徒行伝24:15

サタンの嘘

この主題のこの段階を離れる前に、キリスト教と非キリスト教の宗教の両方で広く受け入れられている「死など存在しない」という誤った説の起源に、十分に注意を向けるために立ち止まっておくのがよいだろう。もし聖書が、死が厳しい現実であり、人間にとって最悪の敵であるとこれほど明確に教えているのなら、死が「別の人生への入り口に過ぎない」という意味で友であるという考えは、一体どこから来たのだろうか。

この問いに対する答えは、創世記に記された、人間が罪と死へと陥った堕落の物語に見出されます。蛇を通じて働きかけたサタン（ ）は、死をもたらす背きが行われる前に、母エバとこの件について語り合う中で、「あなたがたは決して死なない」と言いました（創世記3:4）。神は、不従順に対する罰は死であると告げられました——「あなたがたは必ず死ぬ」と。 （創世記2:17）。聖書全体の証言は、罪の罰とは何かというこの最初の宣言と一致しています。「罪の報酬は死である」とパウロは宣言しています。（ローマ人への手紙6:23）。 「罪を犯す魂は

、死ぬ」とエゼキエルは言っている。（第18章4節）。黙示録20章2、3節には、母エバを欺いた「古き蛇」がそれ以来ずっと欺き手であり続けているという考えが示されており、歴史はこれがまさに真実であることを明らかにしている。 「決して死ぬことはない」というサタンの嘘を補強するために、時代を通じてありとあらゆる欺瞞的な試みがなされてきた。その結果、今日、来世の存在を少しでも信じようとする人々のほとんどは、人間には生来の不死性が備わっているという仮定に基づいて信仰を築いている。しかし、聖書は不死性について何と言っているのだろうか。次の章では、これらの点について論じる。

第2章

人間は不死なのか？

いわゆる「死」が人間を襲ったとき、その人は死の前よりもさらに生き生きとした存在になると主張する、生来の不死の理論は、人間の生体内のどこかに、「魂」と呼ばれる、捉えどころがなく、形がなく、目に見えない自我、あるいは知性が潜んでいるという仮定に基づいている。 神学者たちの主張によれば、この魂は不死であり、死を免れるものである。したがって、肉体が死ぬと、この内なる知性、すなわち「真の人間」は、人間の限界という牢獄から脱出し、はるかに高い存在の次元で永遠に生命を享受する自由を得る——もちろん、それが邪悪な魂でない限りは。 後者の場合、伝統的な神学によれば、その魂は文字通りの炎が燃え盛る地獄で計り知れない苦痛に耐えなければならない。あるいは、ローマ・カトリック神学によれば、天国の自由と祝福を享受できるようになる前に、煉獄で長い期間を過ごすことになる。

「不滅の魂」や「死なぬ魂」といった表現は、宗教的な会話においてあまりにも一般的に使われているため、調査を行っていない人々にとっては、それらが聖書的な用語であると当然のこととして受け止められている。このため、これらの表現が聖書には全く見当たらないということを知れば、多くの人々にとって大きな驚きとなるだろう。人間の魂の伝統

的な不滅性は、純粋に想像の産物であり、聖書的な裏付けは一切ない。

「魂（soul）」およびその複数形「魂たち（souls）」という言葉は、聖書の中で500回以上使用されていますが、人間の魂が不死であるという考えがほのめかされている箇所は、どこにもありません。 それどころか、聖書が魂に関連して死について論じている箇所では、どこでも、魂は肉体と同様に死の支配下にあると、はっきりと明確に述べられている。例えば、主は預言者を通してこう言われる。「見よ、すべての魂はわたしのものである。父の魂がそうであるように、子の魂もまたわたしのものである。罪を犯す魂は、死ぬであろう。」 （エゼキエル書18:4）。新約聖書では、イエスの次の言葉を読みます。「からだを殺しても、たましいを殺すことのできない者たちを恐れてはならない。むしろ、たましいもからだも地獄［ゲヘナ］で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」（マタイによる福音書10:28）。そうです、聖書の地獄に行く魂でさえも、苦しめられたり、苦痛を強いられたりするのではなく、滅ぼされるのです。

旧約聖書における「魂」という言葉は、ヘブライ語の「*ネフェシュ*」から翻訳されたものです。ヤング教授は著書*『聖書分析コンコーダンス』の中*で、この*「ネフェシュ*」という言葉は単に「動物」を意味する、あるいは自由に訳せば「生命を宿すもの」、すなわち生きているもの、つまり知覚を持つ存在を意味すると述べています。 この言葉は旧約聖書に

おいて、人間だけでなく下等な動物に関連して用いられている。民数記31章28節では、牛、ろば、羊といった動物に適用されている。したがって、もし旧約聖書で「魂」と訳されているヘブライ語の「*ネフェシュ*」が不滅の魂を意味すると主張するならば、下等な動物もまた不滅の魂を持っていると結論づけざるを得なくなるだろう。しかし、そのような結論を受け入れる者はほとんどいないだろう。

新約聖書における「魂」という言葉は、ギリシャ語の「*プシュケ*（*psuche*）」から訳されたものです。この言葉がヘブライ語の「*ネフェシュ*（*nephesh*）」とまったく同じ意味を持つことは、使徒ペテロが詩篇16:10（　）を引用する際、後者を訳すためにこの言葉を用いていることからわかります。 使徒のこの引用は使徒行伝2章27節に見られ、次のように記されています。「あなたは、わたしの魂（ギリシャ語「*プシューケ*」、ヘブライ語「*ネフェシュ*」）を陰府に留めることはなく、また、あなたの聖なる者に朽ち果てることを許されることもない。」ペテロは、これがイエスの死と復活に関する預言であり、イエスの魂が陰府に留め置かれなかったことを示していると語っています。

マタイによる福音書26章38節では、イエスが「わたしの魂は死に至るほどに深く悲しんでいる」と語られたと記されています。これは、イエスの魂が「罪のためのいけにえとされた」という預言的宣言と完全に一致しています。そうです、イエスの魂は死に、その偉大な犠牲によって、全人類の魂は死から

贖われ、最終的には死の状態から復活することになるのです。

新約聖書におけるギリシャ語「プシュケ」（英語では「魂」）のもう一つの興味深い用例は、使徒行伝3章20～23節に見られます。ここには、メシアが再臨し、その王国を確立した後に遂行される、回復、すなわち復活の業を描写する預言が記されています。 そこでは、「その預言者の言うことを聞かない（従わない）者は、民の中から滅ぼされる」と告げられています。このように、旧約聖書と新約聖書の両方が、人間の魂は死すべきものであり、死の支配下にあり、そして最終的にはすべての邪悪な魂が滅ぼされるという事実を強調しています。中世の教義が私たちに信じさせようとしたような、保存されて苦しみを受けるというわけではありません。

最初の人間の魂の創造

最初の人間の魂がどのようにして生み出されたかという過程を注意深く見てみよう。これは、魂が実際に何であるかをより明確に理解する助けとなるだろう（ ）。これに関する聖書の記述は創世記2章7節にあり、次のように記されている。「主なる神は地の塵で人を形造り、その鼻の穴に命の息を吹き込まれた。こうして人は生ける魂となった。」

ここで、魂は肉体、すなわち有機体と命の息との結合の結果、あるいは産物であることが示されていることに留意されたい――「人は生ける魂となった」。この箇所は、かつて多くの人が誤って想定して

いたように、神が人を創造し、その後で魂を注入したとは述べていない。むしろ、創造において人が魂に「なった」と宣言しており、これは全く異なることである。

第一に、記録によれば、人の有機体、すなわち体は、「地の塵」から形作られた。これは、人の体が地球に存在する様々な化学元素のみで構成されているという、今日我々が知る事実と科学的に一致している。そして、この有機体の中に、「いのちの息」、すなわち我々が呼吸する空気の中に含まれる生命を吹き込む力、人間と動物の生命の両方に不可欠なものが吹き込まれたのである。 ここで「息」と訳されているヘブライ語は「ネシャマ（neshamah）」であり、ヤング教授によれば、これは文字通り「息」を意味します。それが父アダム（アダム）の鼻孔に吹き込まれたという事実は、それがまさに「息」であったことを強調しています。確かに、鼻孔は不滅の魂が宿る場所としては奇妙な場所のように思えます。

では、この最初の人間の体に「いのちの息」が吹き込まれたとき、何が起こったのでしょうか。それは単に、その体が生き返った、あるいは本文が述べているように、 「生ける魂」となったということです。このように見れば、「魂」とは、実際には、体と、息が持つ生命を与える性質、すなわち「いのちの息」との結合から生じるものです。これを簡単に例えるなら、電灯が挙げられます。 内部が真空で、フィラメントなどを備えた電球という有機体は、そ

れ自体が光ではありません。また、その有機体を流れる電気も、それ自体が光ではありません。しかし、電球と電気の結合によって、光が生み出されるのです。電球（有機体）を破壊するか、あるいは電流（命の息吹に相当するもの）を遮断すれば、光は消えます。つまり、光は消え失せ、存在しなくなるのです。

人間の魂についても同様である。病や事故によって身体が損なわれ、生命の息吹による生命維持の衝動に反応するだけの十分な機能を果たせなくなった時、その個人の魂、すなわち生命は「消える」、つまり存在しなくなり、死ぬのである。 同様に、溺死や窒息のように、何らかの理由や方法で生命の息吹が身体から遮断されると、生命もまた絶え、魂は死ぬ。

もちろん、この点に関して留意すべきは、私たちがその外的な現れをある程度理解できる「生命の偉大な秘密」は、創造主の手中にあるということである。彼は、人間だけでなく、下等動物をも創造した偉大な創造主である。 彼は、地上のあらゆる生命にとって、太陽が自然の光にとってあるような存在、すなわち源である。人間が生物を作り出し、そこに大気の一部を注入して、それを生きさせることは不可能である。文字通りの空気は、人間にとっても下等動物にとっても命の息吹である。なぜなら、それは創造主の媒体であり、 （神の息）によって、命の原理が地上のすべての生き物に伝えられているからである。

しかし、この生命の原理は知性ではなく、単にすべての生命が存在するための神の力に過ぎない。創世記7章15節、22節では、この同じ「いのちの息」が下等な動物にも与えられていると述べられている。

調査を進めていくと、聖書が神の律法に従う人間に対して、未来の永遠の命への希望を提示している理由は、創造主が彼らに命の原理を与え続けようとしているからであり、もともと彼らの生体に死を免れる何かを組み込んだからではないことが明らかになるだろう。

不死の希望

すでに述べたように、「不滅の魂」という表現は聖書には全く見られない。「不滅」という言葉は聖書全体で一度しか使われておらず、その唯一の箇所では、人間ではなく主に対して用いられている。引用する。「今、永遠の、不滅の、目に見えない、唯一の知恵ある神である王に、永遠に、また永遠に、誉れと栄光がありますように。」（テモテへの手紙第一 1:17）。テモテへの手紙第一 6:16にも、前述の箇所と同様に「不死」という言葉が使われている箇所がある。この箇所も主について語っており、次のように記されている。「不死を唯一お持ちで、人が近づくことのできない光の中に住まわれる方。誰も見たことがなく、また見ることもできない方。その方に、永遠の栄光と力がありますように。」 これら二つの聖書の箇所は、人間が本来、不死の被造物であるかという疑問を解決するものである。

「不死」という言葉は聖書の中で他に4回使用されていますが、いずれの場合も、この世において主の足跡を忠実に歩む者たちに対する、将来の な条件付きのご褒美を表しています。 ここで改めて強調しておきたいのは、私たちが人間に来世がないことを証明しようとしているのではなく、むしろ、聖書によれば、来世へのあらゆる希望は、私たちが本来不死であり、したがって死ぬことができないという仮定に基づくのではなく、死者の復活があるという事実に基づいているということである。

復活という一般的な主題についてはひとまず置いておき、ここで少し立ち止まって、クリスチャンが主と共に不死へと高められるという希望について言及している四つの聖句に目を向けたい。 ローマ人への手紙2章7節にはこう記されています。「善を行うことに忍耐強く励み、栄光と誉れと不死とを求める者たち［クリスチャン］には、永遠の命が与えられる。」この箇所は、不死が現在クリスチャンがすでに持っているものではなく、「善を行うことに忍耐強く励む」ことによって追求すべきものであることを示しています。

コリント人への第一の手紙15章53節にはこう記されています。「この朽ちるべきものは、朽ちないものを着なければならず、この死ぬべきものは、不死を着なければならない。」ここでは、「不死」とは、もしそれを手に入れるとすれば、「着る」必要がある性質であることが示されています。使徒は、私たちが今「死ぬべき」存在であることをはっきりと

述べています。 次の節にはこう記されています。「こうして、この朽ちるべきものが朽ちないものをまとい、この死ぬべきものが不死をまとうとき、『死は勝利に飲み込まれる』と書かれている言葉が成就するのです。」

聖書の中で「不死」という言葉が登場する箇所は、他にただ一つ、テモテへの手紙第二 1:10のみです。そこには次のように記されています。「しかし、今や、私たちの救い主イエス・キリストの現れによって、それは明らかにされました。キリストは死を滅ぼし、福音を通して命と不死を明らかにされたのです。」 この箇所から明らかなように、主の初臨以前には、この福音の時代の教会がそうするように勧められているように、不死を目指して努力する機会さえ誰にも与えられていなかったのです。さらに、この箇所は、命と不死へのすべての希望が、イエスとその贖いの業に集約されていることを示しています。

第3章

地獄についてはどうでしょうか？

暗黒時代の迷信によって大きく歪められてきたキリスト教の教義の一つに、神の律法に背く者への罰に関するものがある。「罪の報酬は死である」という聖書の明快な教えを、私たちは見てきた。（ローマ人への手紙6章23節）。また、聖書における「死」の定義は、無意識の状態であり、象徴的には「眠り」と表現されていることも確認した。さらに、死の刑罰は「魂」、すなわち全存在に適用されるものであり、単に人間の肉体の崩壊に限定されるものではないことも分かった。聖書に明記されているこれらの単純だが確かな真理を踏まえると、多くの人々が、悪人に対する永遠の苦しみという教義について、当然かつ適切に疑問を抱くことになるだろう。

この一見難解な問題に対する答えは、永遠の拷問説が純粋に人間が作り出した教義であり、聖書には何ら根拠がないことを理解すれば、明らかになる。確かに、聖書は地獄について多くを語っており、「地獄の火」という表現さえも聖なる記録の中に見出されます。しかし、詳しく調べてみると、聖書における地獄は苦痛の場所などではなく、単に死者の状態に過ぎないことがわかります。そして、私たちが発見したその状態とは、無意識の状態なのです。

もちろん、聖書のすべての翻訳は、旧約聖書のヘブライ語写本と新約聖書のギリシャ語写本に基づいていることは周知の事実である。 したがって、神の

御旨と計画に関わるこの重要な問題について結論を下すための確固たる事実の基盤を得るには、ヘブライ語とギリシャ語の権威者に相談し、「地獄」と訳されている様々な古代語の実際の意味を確認することが不可欠です。 そうすることで、驚くべき情報の洪水がたちまち私たちの前に広がります。

例えば、旧約聖書全体を通して「地獄」と訳されるヘブライ語はたった一つしかなく、その言葉は「*シェオル*」です。この言葉は、合計で65回登場します。時には「墓」、時には「地獄」、また時には「穴」と訳されます。ヘブライ語およびギリシャ語の教授であるジェームズ・ストロング博士は、「*シェオル*」を「死者の世界」と定義しています。 しかし、この「死者の世界」にどのような状態が存在するのかについて明確な結論を下すには、聖書そのものを参照する必要があります。

ヘブライ語の「*シェオル*」は、伝道の書9章10節に登場し、ここでは「墓」と訳されています。引用します。「あなたの手がするべきことを見いだしたら、力を尽くして行いなさい。あなたが向かう墓［*シェオル*］には、仕事も、計画も、知識も、知恵もないからである。」 これが、ヘブライ語の「シェオル」という語の霊感を受けた定義であり、旧約聖書において「地獄」と訳される唯一の語です。この定義は、この「死者の世界」が、知識も意識もない、静寂に包まれた眠りの世界であることを明らかにしています。 アダムの創造からイエスの初臨に至るまでの四千年間、エホバは死者の状態を表すのに、こ

の言葉以外のものを用いたことはありませんでした。もし罪に対する罰が永遠の拷問であるならば、これほど長い間、人々をその事実を知らぬままにしておくことは、極めて冷酷かつ不公正なことではなかったでしょうか。

善良な預言者ヨブは、「シェオル」が眠りに匹敵する無意識の状態であることを知っていました。そのため、精神的にも肉体的にも激しい苦しみの中にあったとき、彼は主に対し、この状態へと下らせてほしいと願ったのです。 そう、ヨブは聖書に記された「地獄」へ行くことを祈ったのです。彼の祈りはこう記されています。「ああ、どうか私を墓（*シェオル*）に隠し、あなたの怒りが過ぎ去るまで私を隠しておいてください。私に定められた時を定め、私を覚えていてください！」 ヨブが神の怒りを逃れるために「シェオル」へ行きたいと願ったことに注目してください。これは、地獄とはそこへ行くすべての人々に神が最も執拗に怒りを下す場所であるという教理上の説とは、いかに異なることでしょう！ここで注目すべきもう一つの点は、ヨブが主の忠実な僕であったにもかかわらず、死んだら聖書の地獄へ行くことを予想していたということです。これは何を意味するのでしょうか？

旧約聖書の中で「シェオル」という言葉が登場するすべての箇所を注意深く検討すれば、この「死者の世界」とは、善人も悪人も、聖人も罪人も、死の瞬間に陥る状態であることが明らかになる。しかし、それは必ずしも死の永続的な状態ではない。 実の

ところ、ヨブは死の状態に留まることを期待していなかったため、祈りの結びに、主が「*シェオル*」から彼を呼び出してくださるよう、主が彼を覚えていてくださるよう願ったのである。彼は「人が死んでも、再び生きるだろうか」と問いかけ、復活への希望を確信して自らその問いに答えている。「あなたは呼びかけ、私は答える。あなたは御手のわざを喜ばれる。」 ヨブ記 14:13-15

旧約聖書において、「地獄」という言葉に苦痛の概念が結びつけられているのは、詩篇116篇3節のたった一箇所だけです。そこには次のように記されています。「死の苦しみ　が私を取り囲み、地獄[*シェオル*]の苦痛が私を捕らえた。」　この箇所の語り手はダビデですが、彼は時折誘惑に屈したことはあったものの、創造主に対する心の忠誠ゆえに、「神の心に適う人」と称されました。　（使徒13:22）。確かに、そのような人物が、教義上の地獄の拷問に苦しむべき対象であるはずがありません。では、彼が「陰府の苦しみが私を捕らえた」と言うとき、一体何を意味しているのでしょうか。

この箇所におけるダビデの言葉の意味は、文脈を考慮すれば明らかになる。彼は、死に至るほど病んでいたにもかかわらず、主がどのようにして彼を死から救い出されたかを語っているのだ。彼が言及する「地獄の苦しみ」とは、明らかに死に至る過程に伴う痛みや苦しみ、すなわち、一時的にはそこから救われたものの、最終的に預言者の死をもたらした病のことである。 この観点から見れば、最終的に死

に至るこの世のあらゆる苦しみは、死の状態、すなわち聖書における地獄である「シェオル」をもたらすものであるため、正しく「地獄の苦しみ」と見なすことができることがわかります。

新約聖書における地獄

新約聖書において、旧約聖書から引用する際、ヘブライ語の「*シェオル*」を翻訳するためにギリシャ語の「*ハデス*」が用いられている。その興味深い例が使徒行伝2章27節であり、そこには次のように記されている。「あなたは、わたしの魂をハデスに留まらせず、また、あなたの聖なる者に朽ち果てることを許さないからである。」 これらの言葉は詩篇第16篇からの引用であり、使徒ペテロの霊感を受けた証言によれば、 、預言者ダビデはイエスの死と復活を予言していた。この預言においてダビデはヘブライ語の「シェオル」を用い、それを翻訳するにあたり使徒はギリシャ語の「*ハデス*」を用いている。 このことから、新約聖書の「*ハデス*」は旧約聖書の「シェオル」と同じ意味を持つことがわかります。伝道の書9:10において預言者が「シェオル」を無意識の状態と定義している以上、新約聖書における「地獄」という言葉の意味について疑いの余地はないようです。

前述の通り、ペテロがイエスの死と復活を指すものとして解釈している詩篇16章10節のダビデの預言は、イエスが死んでいた期間、聖書の「地獄」にいたと位置づけている点で特に興味深い。したがって、聖書の「地獄」は、中世の神学が描き出してきた

ような場所ではないことは明らかである。なぜなら、イエスが拷問の場所へ行ったなどとは、到底考えられないからである。 しかし、聖書の「地獄」が死の状態、あるいは状況であることを思い起こせば、なぜイエスが地獄に行かなければならなかったのかが理解できる。 聖書は、イエスが人類のための贖いの業において、死において罪人の身代わりとなり、世の罪のための身代金、すなわち相応の代価となられたことを明らかにしている。そうすることで、イエスは「すべての人のために死を味わわれた」のであり、それゆえに、死の状態、すなわち聖書の地獄へと入られたのである。—イザヤ書53:3-10、テモテへの手紙第一2:3-6、ヘブライ人への手紙2:9

地獄からの帰還

聖書の地獄が、伝統的な神学が私たちに信じさせようとしているような永遠の拷問の場ではないことを完全に確信するために、黙示録20章13節と14節を見てみましょう。この箇所で、「地獄」と訳されているギリシャ語のハデス（ ）が、聖書の中で最後に使用されています。 引用します。「海は、その中にいた死者を吐き出し、死と地獄［ハデス］も、その中にいた死者を吐き出した。そして、人々はそれぞれの行いに応じて裁かれた。そして、死と地獄［ハデス］は、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。」

前述の箇所を検討すると、三つの顕著な事実が明らかになります。第一に、聖書の「地獄」は、悪人であれ義人であれ、必ずしも永続的な住処ではない

ということです。なぜなら、そこには死者が「引き渡される」と記されているからです。第二に、聖書の「地獄」は火の池ではないということです。第三に、ここで地獄にいたとされている者たちは、そこにいる間は死んでおり、中世の暗黒時代の「呪われた者たちの深淵」で、いわゆる苦痛に苛まれているような生きた状態ではなかったということです。

すでに指摘したように、これは聖書における地獄の最後の言及であり、ここでは、その住人が完全に去り、その後、象徴的な火の池の中で焼き尽くされ、あるいは滅ぼされる場所、あるいは状態として描かれている。 火は科学が知る限り最も破壊的な要素の一つであり、ここでは主によって、エデンの園における私たちの最初の両親の背きから生じた死の状態であるハデスが、ついに滅ぼされるという事実を描写し、あるいは象徴するために用いられている。コリント人への手紙第一 15:26

地獄の鍵

『ヨハネの黙示録』1章18節において、地獄がいずれその死者を明け渡さなければならないという可能性が、イエスご自身によって次のような言葉で示されています。「わたしは、かつて死んだが、今生きている者である。見よ、わたしは永遠に生きている。アーメン。わたしは、地獄と死の鍵を持っている。」鍵は、扉や門の錠を開けるために用いられます。 イエスは、ご自身の死によって、この地獄と死を象徴する鍵を買い取られました。これにより、イエスには死という巨大な牢獄の鍵を開け、そこに囚

われた者たちを解放する神聖な権威が与えられました。そして、「死と地獄は、その中にいた死者を引き渡した」と宣言するこの箇所において、まさにそれが起こっていることが示されているのです。

イエスが今や死者をよみがえらせる神聖な権利を所有していることは、使徒パウロがローマ人への手紙14章9節で次のように述べていることからも示されている。「キリストは、死者と生ける者の主となるために、死なれ、またよみがえり、復活されたのである。」死者の主として、イエスはご自身の公的な権威と力、すなわち「地獄の鍵」を用いて、世界を生命へと回復させると約束された。 これが、ヨハネによる福音書5章28、29節に記録されている主ご自身の言葉の要旨です。「これを不思議に思うな。墓の中にいる者たちはみな、その声を聞いて出て来る時が来る。善を行った者はいのちの復活へ、悪を行った者はさばきの復活へと。」

「シェオル」、*すなわちハデスからの*死者の世界のこの排除に続いて、黙示録20章14節に示されているように、地獄の破壊が起こる。これは新約聖書の著者たちにとって新しい考えではなかった。なぜなら、それははるか以前から旧約聖書の中で預言されていたからである。預言者ホセアを通して、主はこう言われる。 「わたしは彼らを陰府の力から身代金として贖い出し、死から救い出す。死よ、わたしはあなたの災いとなる。陰府よ、わたしはあなたの滅びとなる。悔い改めは、わたしの目から隠される。」 （ホセア書13章14節）。この箇所に示された祝

福に満ちた確信に注目してください。「悔い改めは、わたしの目から隠される。」 すなわち、主は死と地獄を滅ぼすことを定められており、これが堕落した人類に対する主の愛に満ちた御計画の、栄光に満ちた完結となることは確実です。

地獄の金持ち

新約聖書におけるギリシャ語の「ハデス」が、聖書が明確に教えているような死後の無意識の状態ではなく、終わりのない苦痛の場所を意味すると主張する人々は、その論拠を証明するために、金持ちとラザロのたとえ話を引用する。 もちろん、このたとえ話における「地獄」という言葉が「ハデス」の訳語であることは事実である。しかし、この記述を注意深く、偏見なく検討すれば、善良な人々は死後至福の場所へ行き、邪悪な人々は拷問の場所に送られるということを証明するために、このたとえ話を一貫して用いることはできないことが分かるだろう。

新約聖書の『エンファティック・ダイアグロット』訳の著者であるベンジャミン・ウィルソン教授は、「ハデス」が苦痛の場所を意味しないことを知っていたため、このたとえ話におけるその用法の解釈に困惑し、このたとえ話全体が後世の挿入部分であり、実際には聖書本文の一部ではない可能性を示す証拠を脚注として提示している。 これが真実であるかどうかは断言できませんが、この記述を文字通りの事実の記述ではなく、たとえ話として捉えるならば、その信憑性を疑う必要はなさそうです。このたとえ話の詳細を明確に心に留めておくために、ルカ

による福音書16章19節から31節にある記述を注意深く再読することをお勧めします。

文字通りに解釈すれば奇妙

中世の神学によれば、このたとえ話は、キリストを信じるすべての善人は死後天国へ行き、この世でキリストを受け入れないすべての悪人は死後、永遠の苦しみを受ける場所へ行くことを教えるものとされている。しかし、奇妙に思えるかもしれないが、このたとえ話を精査してみると、善人についても悪人についても、また天国についても、まったく言及されていないことがわかる。 このたとえ話に登場する、いわゆる「徳のある男」について語られているのは、彼が貧しく、全身に腫れ物があり、金持ちの食卓から落ちるパンくずを食べ、犬たちが彼の腫れ物を舐めていたということだけである。金持ちについては、ただ贅沢な暮らしをし、立派な服を着て、貧しい男を自分の門口に寝かせていたと語られているに過ぎない。

また、このたとえ話によれば、病に伏した乞食は死後、天国へ行ったのではなく、天使たちに「アブラハムの懐」へと運ばれた。もしこれが文字通りの事実であるならば、死の際に同様の報いを受ける者は他に誰もいないことになる。なぜなら、アブラハムの懐には、一人の病める乞食しか収容できないからだ。 一方、もしアブラハムの懐が天国の象徴であり、その乞食が天国に入る資格を持つ人々の代表であると理解されるならば、私たちにとって唯一の希

望は、死ぬ前に傷だらけの貧しい乞食になること——そう、犬に傷を舐めさせることさえ含めて——にあることになる。

伝統的な神学の観点からこのたとえ話を眺めれば、他にも多くの矛盾が見出される。実のところ、この話には、キリスト教の信者は死後天国へ行き、非信者は苦しみを受ける場所へ行くという説と、 に調和する要素は一つも存在しない。 神学者たちが、神を冒涜する拷問の教義を補強するためにこの物語から取り上げた唯一の点は、金持ちが死後、苦しめる炎に囲まれているとされていることだ。しかし、イエスはこの奇妙な記述によって、一体何を意味しようとしたのだろうか？

私たちはすでに、この聖書の箇所を「たとえ話」であると述べてきました。この考えの中に、その真の意味への答えがあります。たとえ話において、語られていることは文字通りに理解すべきではありません。 イエスがこのたとえ話によって何を教えようとしたのか、断定的に判断することはできないかもしれませんが、「父アブラハム」が際立って言及されていることは、イエスの時代においてアブラハムを父と呼んでいた者たち、すなわちアブラハムの肉的な子孫たちの経験と何らかの形で関係があることを示唆しているようです。（マタイ3:9、ヨハネ8:33,39、ローマ4:1） したがって、このたとえ話の金持ちは、ユダヤ民族を象徴していると結論づけるのが妥当でしょう。これは珍しい象徴ではありませ

ん。今日でさえ、米国を象徴する「アンクル・サム」が存在するからです。

ユダヤ民族は、神の目には王族の民であり、神によって選ばれ、約束された祝福が他のすべての国々へと流れ出るための通路とされていた。このアブラハムの肉による子孫の王族としての地位は、たとえ話の中で、金持ちの紫の衣によって表されている。彼はまた、上質な亜麻布の衣を着ていたが、これは、モーセの律法を守ろうとするユダヤ人の努力と、幕屋での礼拝における な犠牲によって彼らにもたらされた、典型的な義を表していた。 彼らに与えられた豊かな約束の数々によって、たとえ話にある通り、彼らは日々贅沢な暮らしを送っていた。実際、彼らにとってつまずきの石となったのは、主から与えられた豊かな祝福そのものであった。パウロは詩篇69篇22節を引用してこう述べている。「彼らの食卓が、彼らにとってわなとなり、罠となり、つまずきの石となり、報いとなるように。」ローマ人への手紙11章9節

このたとえ話の乞食は、イエスの初臨の時代の異邦人を象徴しているように思われる。神の恵みの観点からすれば、彼らは確かに貧しかったのである。すべての約束はユダヤ人に対して、またユダヤ人を通してなされていた。当時、真の神の祝福を望む異邦人は、改宗者となってユダヤ人になることが求められていた。ユダヤ人にとって、異邦人は「犬」であり、特別な配慮を受けるに値しない存在であった。

イエスの十字架の死と復活の直後、ユダヤ人と異邦人の立場は大きく変化した。ユダヤ人は自分たちのメシアを拒絶し、十字架につけたため、神の恵みから切り捨てられた。この意味において、彼らは「死んだ」のである。彼らは主の御前で最も恵まれた立場を失い、民族として忘れ去られることとなった。しかし、民族としては生き続けており、その日から今日に至るまで、迫害の炎にほぼ絶えず包まれてきた。

その乞食もまた死んだ。すなわち、異邦人はもはや神に完全に無視される民ではなくなり、代わりに神の恵みが彼らに及んだ。そして、信じた者は皆、象徴的に言えば、アブラハムの懐（ ）へと運ばれたのである。彼らは、アブラハムに、またアブラハムを通してなされた約束の相続人となった。 これについてパウロは次のように述べている。「聖書は、神が異邦人を信仰によって義と認めてくださることを予見し、福音に先立ってアブラハムに宣べ伝えたのである。」　（ガラテヤ人への手紙3:8）。福音の時代を通じて、個々のユダヤ人がキリスト者となり、それによってアブラハムの霊的な子となることは可能であったが、神の摂理はこの件を覆し、異邦人をこの点において神の恵みの特別な受け手とするように導いた。彼らは、「アブラハムの懐」に象徴されるように、最も恵まれた地位を占めてきたのである。

たとえ話の中の金持ちが、苦しみをやわらげるために、舌を冷やす一滴の水をラザロに持たせて送っ

てほしいとアブラハムに懇願したように、この時代を通じて、ユダヤ人という民族は、キリスト教の源を通じて救済をもたらしてほしいと、神に幾度となく懇願してきた！しかし、苦難と迫害は続いた。 この長い期間を通じて、ユダヤ人と霊的に恵まれた異邦人の間には、確かに越えがたい大きな隔たりが存在してきた。しかし、このたとえ話の中で、金持ちのこの苦しみは永遠に続くものであると示唆するものは何もない。他の聖書箇所は、ユダヤ民族がアブラハムの肉的な子孫として、かつての神の恵みの座に回復される時が、まさに今ここに来ていることをはっきりと示している。

このたとえ話のもう一つの興味深い点は、金持ちが言及した「五人の兄弟」もまた、アブラハムを父としていると述べられていることです。主の初臨の500年前、ペルシャのキュロス王の勅令により、民族がバビロン捕囚から解放された際、パレスチナに戻った人々のほとんどは二つの部族に属していましたが、すべての部族から少数が戻ってきました。（歴代誌第二36:20-23；エズラ記2:1）。もしこの一人の金持ちが二つの部族を象徴するならば、残りの十部族——その大多数は、メシアの初臨の際にその教えと直接触れる機会を持てなかった——は、五人の兄弟によって適切に表されていると言えるだろう。

このように見れば、このたとえ話の細部はすべて、聖書や歴史的事実と調和していることがわかる。一方、もしこれを、義人の最終的な報いを示すための文字通りの記述だと考えようとすれば、それは極

めて矛盾しており、不合理である。 それだけでなく、すでに見てきたように、旧約聖書の「シェオル」と新約聖書の「ハデス」は、知識のない状態であると明確に述べられているのに対し、このたとえ話ではハデスに苦しみがあるとされているため、聖書が矛盾しており信頼できないということになってしまう。ここで言及されているのは国家的な死であり、その国民は生き続け、迫害され続けているのだと理解すれば、すべてが明らかになる。

朽ちることのない虫 ― 消えることのない火

「シェオル」は旧約聖書で「地獄」と訳される唯一の語であるが、そのギリシャ語対応語である「ハデス」は、新約聖書において「地獄」と訳される唯一の語ではない。古代エルサレムのすぐ外には、死骸や都市の廃棄物が焼却される谷があり、この焼却作業には、おそらく消毒剤として、硫黄が使用されていたと言われている。 この場所はヘブライ語で「ヒンノムの谷（ ）」と呼ばれ、ギリシャ人はそれを「ゲヘナ（Gehenna）」と呼んだ。したがって、このギリシャ語「ゲヘナ」は新約聖書で数回使用されており、しばしば「地獄」と訳されている。ユダヤ人が復活に値しないと見なした特定の犯罪者の死体はゲヘナに投げ込まれたと言われている。それゆえ、イエスは、完全に故意に罪を犯した者たちが最終的に向かうことになる永遠の滅びの状態を表すために、この言葉を用いているのである。

この「ゲヘナ」という言葉は、マルコによる福音書9章43節から48節において「地獄」と訳されてい

ます。その箇所は次のように記されています。「もしあなたの手があなたを罪に誘うなら、それを切り捨てなさい。両手を持って地獄、すなわち消えることのない火の中へ落ちるよりは、不具となって命に入るほうが、あなたにとってよい。そこでは、虫は死なず、火は消えることがない。 また、もしあなたの足があなたをつまずかせるなら、それを切り捨てなさい。両足を持って地獄の、決して消えることのない火の中に投げ込まれるよりは、片足で命に入るほうが、あなたにとってよい。そこでは、虫は死なず、火は消えることがない。 もしあなたの目があなたを罪に誘うなら、それを引き抜け。両目を持って地獄の火に投げ込まれるよりは、片目で神の国に入るほうが、あなたにとってよい。そこでは、虫は死なず、火は消えることがない。」

前述の箇所の各箇所において、「地獄」という言葉はギリシャ語の「ゲヘナ」の訳語であり、したがって、ヒンノムの谷で絶えず燃え続ける火の破壊的な影響という象徴的な意味への言及であることは明らかである。全体像は、苦痛というよりはむしろ破壊のそれである。「死なない虫」への言及さえも、この破壊のイメージを強めている。なぜなら、これらの虫は疑いなく、あらゆる死骸に群がるものだからである。　もちろん、この箇所の翻訳者たちは、永遠の拷問という説を信じており、自分たちの迷信を裏付けるかのような翻訳を提示するために最善を尽くした。それゆえ、「消えることのない」火や「死なない虫」といった表現が、火の地獄における永

遠の拷問こそが悪人の運命に違いないと、一部の人々を納得させるような文面を与えているのである。

しかし、もし私たちが常識を用いるならば、この箇所にはそのような問題は全く存在しないことが分かるだろう。 燃やされているものを完全に焼き尽くす火は、本来「消えぬ火」と呼ばれる。手近にある可燃物がすべて燃え尽きるまで燃え続ける火は、消えることのない火ではあるが、永遠の火ではない。つまり、イエスはここで、罪人が罪の完全な報い、すなわち死や滅びから逃れることはできないという事実、すなわち、滅びの火は消えることがないということを示していたのである。 また、もし何らかの理由で象徴的な火が破壊の業を完遂しなかったとしても、常に存在する「虫」がそれを成し遂げるだろう。したがって、あらゆる観点から見て、主はここで破壊の象徴を用いられており、それは「罪の報酬は死である」という聖書の統一された証言を改めて裏付けている。ローマ人への手紙6章23節

この聖句の残りの部分もまた象徴的です。目、手、足は、その有用性ゆえに最も高く評価されています。そして、永遠の命を失うよりはそれらを手放すべきだとイエスが示唆されたことは、私たちの永遠の存在を危険にさらすよりは、この人生においていかなる犠牲も喜んで払うべきだ、という別の言い方に過ぎません。

この箇所の第一の適用対象は、明らかにクリスチャン、すなわちイエスの足跡に従うことを誓約した者たちに限られますが、同じ原則は千年王国の時代

における故意に悪を行う者たちにも適用されるでしょう。クリスチャンは今、命をかけた試練の最中にあり、勝利を得る最も確実な道は、神への奉仕においてすべてを犠牲にすることです。

イザヤ書66章24節は、千年王国の時代に故意に罪を犯す者たちが滅ぼされる様子を、主が用いたのと同様の言葉で描いています。イエスはこの箇所を引用し、滅びという象徴を、今まさに命の試練に直面している者たちに当てはめたのかもしれません。 引用します。「彼らは出て行き、わたしに背いた者たちの死体を眺める。彼らの虫は死なず、彼らの火は消えることがない。彼らはすべての肉なる者にとって忌まわしいものとなる。」

彼らの苦しみによる煙

『ヨハネの黙示録』14章10節、11節は、時折、苦痛の教義の証拠として引用される。この聖書箇所は次のように記されている。 「その者は、神の怒りのぶどう酒を、混ぜ物なしに、神の憤りの杯に注がれたまま飲むことになる。そして、聖なる御使いたちと小羊の御前で、火と硫黄によって苦しめられる。彼らの苦しみの煙は、永遠に上っていく。また、獣とその像を礼拝し、その名の刻印を受けた者は、昼も夜も休むことがない。」

もしこの箇所が、主によって文字通りの事実として述べられているのであれば、人類の多くがこれについて特に心配する必要はないだろう 。なぜなら、その苦しみは、獣または獣の像を礼拝する者たちの

上に下るとされているからである。 異教の地で獣を崇拝した人々はいるものの、ここに描かれているような文字通りの獣——ヒョウに似て、熊の足、獅子の口を持ち、七つの頭と十本の角を持つ獣——を崇拝した者は、たとえいたとしてもごくわずかである。（黙示録13:1,2） この箇所は、文字通りの観点から見るとさらに不可解なものとなる。なぜなら、その苦しみは聖なる天使たちの面前で起こるからであり、これは容易に「天において」という意味に解釈され得るからだ。確かに、天においてそのような状況が存在するとすれば、それは多くの人が考えてきたものとは全く異なる種類の場所ということになるだろう。

『ヨハネの黙示録』は象徴に満ちた書物であり、この箇所も例外ではない。 ここでの「獣」は、明らかに人間への礼拝を強要する偽りの宗教的・政治的体制であり、象徴的に示されている考えは、小羊に従い真の神を礼拝すると公言しながらも、その代わりにこの獣に忠誠を誓う者たちは、様々な苦難にさらされ、この時代が最終的に終わる「大患難の時代」において、すべての偽りの体制に降りかかる苦しみの一端を味わうことになる、というものである。この箇所には、その苦しみは死後に起こることを示唆するものは何もない。

彼らの苦しみから立ち上る「煙」とは、明らかに象徴的な表現であり、その苦しみの痕跡、あるいは記憶が、真の神以外の何物か、あるいは誰かを崇拝することの結果を、永遠に人々に思い起こさせるも

のとなることを示している。この箇所の詳細が何を意味するにせよ、この箇所を、悪人に対する永遠の拷問という「暗黒時代」の説を立証するために一貫して用いることは、決してできないのである。

サタンはいかにして苦しめられるか

永遠の苦しみという教義を「証明」しようと試みる一部の人々は、黙示録20章10節の記述を捉え、それが苦しみ説を裏付けると主張している。引用する。「彼らを惑わした悪魔は、獣と偽預言者がいる火と硫黄の池に投げ込まれ、昼も夜も、永遠に苦しみを受けることになる。」 すでに述べたように、聖書は「火の池」と「地獄」、すなわちハデスとを明確に区別しており、後者が前者に投げ込まれるとされている。　（黙示録20章14節）。サタンに下るとされるこの「苦しみ」は、明らかにサタンに限定されたものであり、地獄から救い出され、「涙をぬぐい去られる」と言われる者たちには当てはまらない。黙示録21章4節

では、サタンはどのようにして苦しみを受けるのだろうか。もし他の誰にも当てはまらないのなら、暗黒時代説は彼に適用されるのだろうか。我々はそうは考えない。ここで「苦しめられる」と訳されているギリシャ語は、ストロング教授によれば、ギリシャ語の「バサノス（*basanos*）」に由来し、その文字通りの意味を彼は「試金石」としている。 同じ語は、ペテロの手紙第二2章8節では「悩まされる」と訳されており、そこではソドムの住民たちの邪悪な行いが、義人ロトの魂に与えた影響について語ら

れている。ロトの場合、明らかに、彼は日々、比較を通じて、神を敬わない生活がもたらす恐ろしい結果を学んでいたという考えである。

悪魔がどのように「苦しめられる」かという正しい考えを得るには、イザヤ書14章15～17節の預言（）を検討することが役立つ。 引用します。「しかし、あなたは陰府（*シェオル*）に、穴の底へと落とされる。あなたを見る者は、あなたをじっと見つめ、こう言うだろう。『これは、地を震わせ、王国を揺るがし、世界を荒れ野とし、その町々を滅ぼし、死の囚人の家を開かなかった者か』と。」

サタンの滅亡に関するこの預言を、彼の「苦しみ」についての黙示録の記述と比較すると、悪魔は神に対する反逆の道が招く恐ろしい結果の永遠の戒めとなり、永遠の時代を通じて、救われた人類は彼を嘲笑し続けるだろうということが明らかであるように思われる。悪魔自身が、自分に向けられている嘲笑を自覚するわけではない。本文の意味において、それは必要ではないからである。 例えば、私たちの日常会話においても、地域社会で嫌われていた人物について、「あの人も死んだのだから、もう彼について語り続けても何の意味もないのだから、安らかに眠らせてあげよう」と言われるのを耳にすることがある。

実際、もちろん、私たちが何を言おうと何をしようと、すでに亡くなった者に何の影響も及ぼすことはない。それは、サタンに降りかかる永遠の恥辱が、彼が最終的に火の池で滅ぼされた時には彼に影響

を及ぼさないのと同じである。それにもかかわらず、人々は彼を安らかに眠らせることはしない。彼らは、邪悪で利己的な生き方の悲惨な結末の例として、彼を引き続き引き合いに出し続けるだろう。 こうして、悪に対する神の許容は、人類の家族のうち、進んで従順な者すべてにとって永遠の祝福をもたらすものとして現れ、それが、すべての者が善と悪を賢明に見分けることができる基準となるのである。疑いなく、大多数は善を選ぶだろう。

第4章

霊とスピリチュアリズム

「キリストもまた、罪のために一度苦しまれました。義なる方が不義なる者のために苦しまれたのは、あなたがたを神のもとへ導くためです。キリストは肉体においては死に、霊においては生かされました。生かされた後、キリストは行って、囚われの身にある霊たち、すなわち、ノアの時代に箱舟が造られている間、神が辛抱強く待っておられたときに不従順であった者たちに、宣教をされました。その箱舟の中で、水によって救われたのは、わずか八人だけでした。」 ペテロの手紙一 3:18-20

ある主題に関する神の言葉の真理は、その主題についての証言全体を考慮して初めて正しく理解され、評価されるものであることは、イエスの死と復活の間の期間におけるイエスの状態と所在に関するいくつかの記述によってよく示されている。

使徒ペテロが引用し、主の死と復活に当てはめた、イエスに関する旧約聖書の預言において、イエスは陰府におられたとされています。 （詩篇16:10；使徒行伝2:27-32）。十字架上の盗人にイエスご自身が語られた言葉に対する誤解により、多くの人が、イエスは死んだ瞬間に「楽園」へ行ったと信じ込まされてきました。また、今回の聖句を表面的に読むと、イエスはどこかへ行って「牢獄に囚われた霊たち」に説教されたことになってしまいます。

以前の議論で、聖書における地獄とは死の状態であり、旧約聖書の「シェオル」や新約聖書の「ハデス」は、完全な無意識の状態を表す な言葉であることを学びました。（伝道の書 9:10）。イエスは、父なるアダムとその子孫の身代金、すなわち贖いとして死なれ、それによって罪人の立場を引き受けられた。したがって、イエスがこの死の状態、すなわち聖書の地獄に入られることは必要であった。

「彼は悪しき者たちと共に墓に葬られた」と、預言者はイエスについて宣言した（イザヤ書53:9）。聖書の真理におけるこの基本的な事実に照らし合わせて、十字架での死から三日後の復活までの間、イエスがどこにいたのかについて、聖書が他に何を語っているのかを理解しようと努めなければならない。

他の聖書の箇所が、イエスが死によって意識を失っていたことを示している時期に、どうしてイエスが「牢獄にいる霊たち」に説教することができたのかを明確に理解するためには、まず、イエスが説教した「霊たち」が誰であったかを特定する必要がある。ペテロは、「ノアの時代、神が辛抱強く待っておられた時に、不従順であった者たち」という言葉で、この情報を私たちに与えている。

そこで彼は行って、牢獄にいる霊たち——すなわち、ノアが舟を造っている間、神が辛抱強く待っておられた時に、はるか昔に神に背いた者たち——に説教した。

ペテロは第二の手紙において、「霊」の正体をさらに明確に示し、次のように述べている。「神は、罪を犯した天使たちをも容赦せず、彼らを地獄に投げ込み、暗闇の鎖につなぎ、裁きのために留めておかれた。また、神は昔の世をも容赦せず、ただ、義を宣べ伝えたノア、すなわち八人目の人を救い、不敬虔な世に洪水をもたらされたのである。」（　）ペテロの手紙第二 2:4,5

上記の引用から、イエスが説教した「霊」とは、洪水の際、神に背いたある特定の「天使」の集団であったことが分かる。 使徒ユダも同様に、これら同じ存在について言及しており、彼らを「天使」と呼び、彼らの特別な罪を「本来の地位を守らなかった」ことであると説明している。またユダは、ペテロと同様に、これらの「天使」が今や投獄されていることを説明し、さらに彼らが「闇の鎖」につながれ、大いなる日の裁きを待っていると付け加えている。ユダの手紙 6節

したがって、これらの「牢獄に閉じ込められた霊」とは、死んだ人間の「霊」や「亡霊」ではなく、天使的な存在の次元にいる霊的な存在である。これは常に心に留めておくべき重要な真理である。

私たちは、神の地上の創造の領域が、私たちにとって目に見え、理解できるものであることを理解しています。そこには、最も低い形態である「単細胞」の生命から、その完全さにおいてこの物質的、すなわち地上の領域の王であった人間に至るまで、様々な存在のレベルがあります。 聖書は、神の創造に

おけるこの多様性が、私たちの目に見える範囲をはるかに超えたより高い領域にまで及んでいることを示しています。すなわち、神の地上の被造物の中で最も高い存在である人間の上には、霊界があり、その霊界においても、自然界と同様に、天使やケルビムなど、様々な階級の存在が存在することを示しています。

人間について、詩編の作者は、「あなたは彼を天使より少し低い者とした」と宣言している。（詩篇8:5）。　イエスが人類の贖い主として地上に来られ、死なれたとき、彼は「肉となった」のであり、人として死なれた。しかし、復活されたとき、彼は「この世だけでなく、来るべき世においても、あらゆる支配、権威、力、権能、そして名付けられるあらゆる名よりもはるかに高く」上げられたのである。（エペソ人への手紙 1:21）。このように、聖書は地上の存在の次元と霊的な存在の次元との間に、明確な境界線を示している。

聖書は、現在、聖なる天使と不聖なる天使の両方が存在することを示している。もっとも、創造された当初、これらすべての霊的存在は神と調和しており、様々な役割で神に仕えていた。創造主との調和を保った天使たちについて、使徒は、彼らが今や「救いの相続人となる者たちのために仕えるために遣わされた、仕える霊たち」であると述べている。ヘブル人への手紙1:14

また、「御使いについて、こう言われています。『御使いを霊とし、その奉仕者を火の炎とする方』

」（ヘブル人への手紙　1:7）。クリスチャンのために仕えるこれらの御使いについて、イエスはこう言われました。「これらの小さな者たちのひとりでも軽んじてはなりません。天におられるわたしの父の御顔を、彼らの御使いはいつも見ているからです。」- マタイによる福音書 18:10

地上の「天使」と天上の「天使」

聖書を学ぶ者は、聖書において「天使」という用語が時に人間を指すことがあるという事実によって混乱してはならない。この言葉は文字通り「しもべ」または「使者」を意味し、それが用いられている箇所が人間の使者を指しているのか、それとも天の、すなわち霊の使者を指しているのかを、文脈から判断することが常に必要である。

一方で、聖書は「天使」と呼ばれる霊的な存在がいることを明確に示している。 例えば、イエスが生まれた夜、「天使」が羊飼いたちにその誕生を告げました。この務めを果たしたのが霊的な存在であったことは、次の言葉から明らかです。「すると、その天使と共に、多くの天の軍勢が現れ、神を賛美して言った。『いと高き所にいる神に栄光があり、地には平和、人々に善意があるように。』」（ルカ 2:10-14）。　同様に、マリアに彼女がイエスの母となることを告げたのも霊的存在であり、ゲツセマネの園でイエスに仕えたのも霊的存在でした。イエスは、父に願えば、自分を助け守ってくれるために十二軍団以上の天使が与えられると語った際、天の御

使いたちについて言及していました。ルカ1:26-38; 22:43; マタイ26:53

しかし、すでに見てきたように、これらの天使たちのすべてが、創造主であるエホバに忠実であり続けたわけではありません。そのうちの何人かは、「神がノアの時代に辛抱強く待っておられた頃、はるか昔に不従順であった」のです。 （ペテロの手紙一3:20）。こうした不忠実な者たちは、一般に「堕天使」と呼ばれるようになった。聖書によれば、彼らの反逆に対する罰として、彼らは今や「闇の鎖」に縛られ、閉じ込められている。

「霊」はどこにいるのか？

すでに引用した箇所において、使徒は、これらの堕天使たちの な牢獄がどのようなものであるかについて、極めて重要な情報を与えてくれている。その箇所を再び引用する。「神は、罪を犯した天使たちをも容赦せず、地獄に投げ込み、暗闇の鎖につないで、裁きのために留めておかれたのである。」（ペテロの手紙第二 2:4）

先ほど引用した箇所の「地獄」という言葉は、ギリシャ語の「ハデス」や「ゲヘナ」のいずれの訳語でもありません。ここで使徒が用いている用語は「タルタロオ」であり、これが聖書に登場する唯一の箇所です。「タルタロオ」はギリシャ語の「タルタロス」に由来し、ギリシャ神話において暗黒の深淵や牢獄を指す名称として用いられていた言葉です。検討中の本文において、「地獄に投げ込まれる」と

いう表現全体が「*タルタロー*」の訳語として用いられている。したがって、この言葉は場所というより、むしろ行為を指していることは明らかである。罪を犯した天使たちの堕落とは、栄光と尊厳から不名誉と非難へと転落したことであり、その考えは次のようなものと思われる。「神は罪を犯した天使たちを容赦せず、彼らを貶め、闇の鎖の中に引き渡された。」

これらの天使たちは、本来の聖なる状態において、強大で力強く、尊厳に満ちていた。彼らは明らかに大きな自由を享受しており、神および神の地上の友への奉仕において、おそらくは地球と創造主の広大な宇宙の他の領域との間を頻繁に行き来していたのだろう。ユダは、これらの天使たちが「本来の地位を守らなかった」と述べている。 これは、創世記6章2節の「神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、自分たちが選んだ者すべてを妻とした」という記述に光を当てている。言い換えれば、これらの天使たちの「罪」は、少なくとも部分的には、人間の姿に現れ、人の娘たちと不義の関係を結んだことにある。

聖書が扱う歴史的期間のさまざまな時期に、聖なる使者、すなわち天使たちが、預言者やその他の人々にメッセージを伝えるために地上に遣わされました。そして、そうした多くの機会に、彼らは物質化して人間の姿で現れることを許されていました。 その一例として、イサクの誕生に先立って三人の天使がアブラハムを訪れた出来事が挙げられる（創世記

18:1-22）。このような実体化は、主によって認められ、かつそれに加わる天使たちがその特権を逸脱しない場合に限り許容されていた。大洪水以前に罪を犯した天使たちは「本来の地位を守らなかった」、すなわち、人間として人類との関わりを続けることを選んだのである。

堕落した人類との不適切な関係によって自らの力を制限し、堕落させてしまった彼らにとって、追放され、卑しめられるという罰が下され、同時に「闇の鎖に縛られる」こととなったのは、まさに相応しいことでした。 本文に見られる「牢獄」という言葉の使用に含まれる考えは、自由の制約である。したがって、これらの「霊」は確かに「牢獄」にあり、創造主との完全な交わりと調和の中にあった時に持っていた通常の自由の多くを制限されているのである。

これらの堕天使たちが閉じ込められている場所が、私たちの地球の大気圏であり、彼らの影響範囲は主に人類との間接的な接触に限定されているという考えを支持する聖書の証拠は数多くあります。イエスの宣教に関する福音書の記述には、イエスが「悪魔」や「悪霊」を追い出したという記述が頻繁に見られます。 その後、使徒たちは、異なる　な存在に対して同様の奉仕を行う特権を与えられました。高等批評家たちは、イエスや使徒たちがこのように対処した「憑依」の事例は、単なる精神異常や神経障害に過ぎないと証明しようと試みていますが、これらの「悪魔」には人格が明確に付与されているとい

う考えがあまりにも確固たるものであるため、そのような自由奔放な解釈を許容することはできません。

サウル王とエン・ドルの魔女

新約聖書だけでなく、旧約聖書においても、これらの堕天使、すなわち「牢獄に閉じ込められた霊」の限定的な活動の証拠が見出される。例えば、サウル王とエン・ドルの魔女の事例がある。モーセの律法はあらゆる魔術を禁じていたが、これらの古代の霊媒たちは、たとえ死の危険を冒すことになっても、その悪質な行為を続けた。 今日の霊媒たちが死者と交信する能力を主張するように、エン・ドルの魔女も明らかに同様の主張をしていた。サウル王は、その邪悪さゆえに神の御心から離れ、敵に敗れるという重大な危機に直面したとき、死んだ預言者サムエルが自分のために何かできるかどうか確かめるべく、その魔女にサムエルと連絡を取るよう頼んだのである。

この古代の降霊会の記録は、サムエル記上28章7節から20節に記されている。多くの聖書研究者は、死んだ預言者サムエルとの通信とされるこのサウルの物語を読み、死者は実際には死んでおらず、どこか別の場所で生きており、特定の条件下、特に霊媒の助けを借りれば、彼らと通信が可能であるという、優れた聖書的証拠を提供していると結論づけてきた。 実のところ、古来よりサタンは、「罪の報酬は死である」という聖書の明快な教えを偽りとするべく、この 同じ欺瞞の手法を用い続けてきた。サウル

が魔女を訪ねたことに関する事実を簡単に検討すれば、現代の交霊会にもほぼ同様の類推が適用でき、同じ結果をもたらすことが容易に理解できるだろう。ローマ人への手紙6章23節

第一に、サウル自身の言葉によれば、彼はもはや神の御心に適っていなかったことがわかります。彼は魔女にこう言いました。「神は私から離れ、もはや預言者によっても、夢によっても、私に答えてくださらない。」 サムエルが生きていた間、彼は主の忠実な僕であり預言者であり、主の御心に逆らうことを決して望みませんでした。それにもかかわらず、ここでは、神がその考えを喜ばれないと自ら認めていたサウルが、この忠実な預言者からのメッセージを得るよう魔女に求めているのです。

もしサムエルが、天国であれ他の場所であれ、生きていたと仮定したとしても、彼が地上であった時よりも主への従順さが欠けることなどあるだろうか？それとも、主によって裁きを受けているこの邪悪な魔女が、神の御心を阻む力を持っており、サムエルを呼び出すだけでなく、この反逆的な王を慰めるために彼からメッセージを引き出すことさえできたと信じるべきなのだろうか？ したがって、この記述は、サウルの生涯における重要な出来事の単なる歴史的記録として聖書に記されているに過ぎず、魔女がサムエルを見たり話したりしたという主張を正当化しようとする意図は全くないことは明らかである。

エンドルの霊媒を通じて悪霊たちが用いた手法は、今日使われているものと似ていた。彼らは、あの老いた預言者の馴染み深い姿を、いつものように長いマントをまとった姿で、魔女の心の眼の前に浮かび上がらせた。彼女がその心象、すなわち「アストラル」な映像を説明すると、サウルはそれがサミュエルの描写であることを即座に認めた。 しかし、サウル自身は何も見ていなかった——彼はその描写から、それがサムエルであることを「察した」のである。

そのような状況下では往々にしてそうであるように、サウルは容易に納得してしまった。サウルは、もしサミュエルが今や霊的存在であり、以前よりもはるかに恵まれた状態にあるのなら、なぜ地上にいた頃と同じように老いて背を丸めているのか、と疑問に思うことはなかった。 また、サウルは、なぜサムエルが霊界で、地上の存在として彼を知っていた頃と同じ古いマントを身に着けているのか、と問うことも思いつかなかった。預言者のマントや白髪などが、とっくに墓の中で朽ち果てているはずだという点について、立ち止まって考えることさえしなかったのだ。 サウルは主に見捨てられており、今や預言者に成りすまし、霊媒である魔女を通じてサウルに語りかけるこれらの「偽りの霊」に、容易に欺かれてしまったのである。

「なぜ私を呼び起こして、私を悩ませるのか？」彼女は、死んだ預言者がそう尋ねているかのように伝えた。サウル王の時代のイスラエル人にとって、

死者は「シェオル」で眠っているというのが一般的な理解であったため、「なぜ私を呼び起こして、私を悩ませるのか」という問いかけは、奇妙に聞こえるものではなかった。 しかし、この罪に定められた魔女に、預言者を死から甦らせる力があったと、一瞬でも想像できるだろうか？あるいは、現代のスピリチュアリズムの観点から見て、サムエルは全く死んでおらず、霊界で楽しんでいたとするなら、彼が魔女によって「天から下る」のではなく、地上から「上る」と されたというのは、奇妙に思われないだろうか？

現代の神学の観点から見れば、来るべき日の戦いでサウルが敗北し死ぬという「サムエル」の預言は、なんと全くもって荒唐無稽なものであろうか！ 引用する。「明日、あなたとあなたの息子たちは私と共にいる。主もまた、イスラエルの軍勢をペリシテ人の手に渡されるであろう。」敬虔なサムエルと愛すべきヨナタンが、邪悪なサウル王と共に霊界にいる姿を想像してみてほしい！これは中世の教義的神学とよく合致するだろうか？決してそうではない！もちろん最終的には、翌日のことではないが、これらすべての人々は死において、すなわち聖書の地獄である「シェオル」において共にいた。彼らは今もそこで復活を待ち望んでおり、やがて人の子によってすべてが呼び起こされるだろう。しかし、サウルが間近に迫る敗北と死を正確に予言するために、魔女側に超自然的な力は一切必要なかった。実際、サ

ウルはすでにそれを恐れていたからこそ、魔女に助けを求めたのである。

チャールズ・ウェスレーは、エン・ドルの「霊媒」が善と悪を死の中で共に扱ったことに明らかに戸惑っていたようで、彼は次のように記している。

その厳粛な言葉は何を予兆しているのか？
命が尽きる時、希望の光とは？
汝と汝の子は確かに
明日、私と共に安らぎを得るだろう：
地獄の苦痛の中にいるのではなく、
もしサウルがサムエルと共にいるならば；
呪われた絶望の中ではなく、
愛するヨナタンがそこにいるならば。

実のところ、もちろん、サウルはサムエルとは全く交信していなかった。彼が交信していたのは、大洪水の時代以来、特に死者の状態に関して人類を欺くことを主な活動としてきた「牢獄の霊」の一人、あるいは数人であった。聖書に記されているこれらの降霊術師、魔女、霊媒の存在は、これらの堕天使たちが霊媒を通じてイスラエルとの交わりを求めていたことを示唆している。 しかし、どうやらこれらの霊媒たちは、時折その顕現の様式を変えるのが常のようだ。かつてニューイングランドやオハイオ、そしてヨーロッパ全土で魔術が一時隆盛を極めたが、次第に衰退し、スピリチュアリズムに取って代わられたのと同様に、スピリチュアリズムにおけるテ

ーブルの傾きやノック音といった顕現もまた、次第に透視能力や物質化の試みへと移行しつつある。 主と使徒たちの時代には、これらの「霊」の働きは、明らかに魔術の手法から、憑依や取り憑きという形へと変化していた。

「霊」の現代における働き

かつて人間として実体化する力を与えられながらそれを乱用したこれらの堕天使たちは、今もなお、「霊媒」を利用するか、あるいは憑依のように心を直接支配することで、人間の媒介を通じてその力を行使することに固執しているようだ。しかし、これらの「霊」が憑依するためには、人間の意志がこの異質な支配に同意しなければならないことは明らかである。 しかし、一旦憑依されると、意志は著しく崩壊し、 もはや抵抗する力は残されていないようだ。それゆえ、当時、悪魔に憑かれた者たちは、イエスと使徒たちの働きをこれほどまでに高く評価していたのである。

これらの堕落した天使的存在は、人間と接触し欺く手法を時折変えるかもしれないが、その影響力は概して常に神から離れ、神の御言葉の真理から遠ざかるものである。現代では死者と交信することについて大騒ぎがなされているが、科学的に管理されたものを含め、これまで行われた何千もの試みにおいて、その総括的な結果はどのようなものであっただろうか。 確かに、エン・ドルの魔女がサウルに押し付けたような荒唐無稽な「身元確認」によって、多くの人が亡くなった友人や親族と接触したと確信さ

せられてきた――しかし、それ以上の進展はなかった。霊媒的な手段を通じて、価値ある情報が得られたことは一度もない。

キリストが牢獄の霊たちに説教された方法

ペテロが、イエスが説教したと伝えているこれらの「霊」が誰であるかが分かったところで、疑問が生じます。この説教はどのようにして行われたのでしょうか。意識が存在しない「シェオル」、*すなわちハデスにイエス*がいたとすれば、どうして同時にこれらの堕天使たちに説教することができたのでしょうか。この一見難解な点を、もう少し批判的にこの箇所を検討してみれば、その説明は単純なものとなります。 使徒は、イエスが「行って、牢獄にいる霊たちに宣教された」と述べています。ギリシャ語の権威者たちは、「行って、宣教された」という言葉が、単にどこかに「行く」という意味ではなく、何かを「成し遂げる」という意味で使われている点で一致しています。言い換えれば、この二つの言葉は、本文にとって不要な な付加に過ぎないのです。昔はこのような表現を使うのが慣例であり、今日でも時折使われていることがわかります。

ベンジャミン・ウィルソン博士は、自身の『エンファティック・ダイアグロット』において、この聖句を「彼は獄中の霊たちに説教した」と訳し、本文を正しく理解する上で不要であるとして、「行って」という二語を省いている。 この箇所の脚注において、彼は他の権威者たちもこの点で自身の見解に同意していることを示している。したがって、これら

二つの不要な語句を除くと、全文は次のように読まれる。「キリストもまた、罪のために一度苦しまれた。すなわち、義なる方が不義なる者のために苦しまれたのである。それは、私たちを神のもとへ導くためであり、肉において死に、御霊によって生かされたからである。また、その御霊によって、キリストは牢獄にいる霊たちに宣教されたのである。」（ペテロの手紙一　3:18,19）。ここでの意味は明らかであり、すなわち、イエスがこれらの堕天使たちに説教されたのは、その死と復活によるものであったということである。それは、これらの「霊」たちが反逆した天の父であり創造主に対する、イエスの忠実さによって示された実例による教訓であった。

ルシファーは、神に反逆したこれらの霊的存在たちの最初のものであり、彼は後に反逆者の仲間入りをした者たちに対して、明らかに多大な影響力を行使していた。　マタイによる福音書25章41節の「悪魔とその天使たち」という表現は、サタンとこれらの他の堕落した霊的存在との間に密接な関係が存在することを示している。ルシファーの堕落をもたらしたのは、野心と高慢の霊であった（イザヤ書14章14節）。そして、明らかに同じ霊が、これらの下位の堕天使たちの間にも蔓延している。 したがって、イエスの忠実さ——すなわち、自らを低くし、死に至るまで従順であったその忠実さ——は、これらの「牢獄に囚われた霊たち」にとって、力強い説教となるだろう。その説教の力は、これらの「霊たち」が、イエスがその忠実さゆえに死からよみがえり、

神の右の座に高く上げられた一方で、自分たちは不忠実ゆえに堕落し、卑しめられたことに気づいたとき、さらに増大するであろう。

このように、死者の状態に関する様々な聖書の箇所は、一つひとつ正しく理解されるにつれて、「罪の報酬は死である」という偉大で根本的な真理、そして「死者は何も知らない」という真理と調和していることが分かるのである。伝道の書 9:5

第5章

天国とは何か

「私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえましょう。神は、その豊かなあわれみによって、イエス・キリストの死者からの復活により、私たちを生き生きとした希望へと新たに生み出してくださいました。それは、天にあなたがたのために備えられている、朽ちることなく、汚れなく、衰えることのない御国への相続分です。」

- ペテロの手紙一 1:3,4

罪人であろうと聖徒であろうと、墓の向こうに何が待っているかを聖書的に理解するためには、天について霊感を受けた記録が何を語っているかを考慮に入れる必要がある。神が人を地上で生きるために創造されたこと、そして地が人の住まいとして創造されたことは、聖書の事実として疑いようがない。人は地上の支配権を失い、罪のために死の宣告を受けましたが、贖い主であるイエスの死と復活によって、地上での命への回復が保証されています。すべての人が栄光に満ちた地上で完全な人間としての命に復活するというこの一般的な復活の例外となるのは、主の足跡を忠実にたどる者たちであり、聖書は彼らが天の報いを受けると明確に述べています。

聖書、特に新約聖書は、天国と天の希望について多くを語っている。例えば、イエスはこう言われた。「わたしの父の家には、住むべき所がたくさんある。もしそうでなかったなら、あなたがたに言った

であろう。 わたしは、あなたがたのために場所を用意しに行く。そして、もしわたしが行って、あなたがたのために場所を用意したら、また戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎え入れよう。そうすれば、わたしがいるところに、あなたがたもいることになる。」ヨハネ14:2,3

これは極めて明確な約束であり、地上の状態から霊的な状態への変化を明らかに示唆している。しかし、この主の言葉には多くの誤解が付きまとっている。 私たちはしばしば、これらの「多くの住まい」の一つを所有したいという希望を耳にしますが、イエスは、それらが弟子たちのためのものではなく、むしろ、彼らのために「場所を備える」ためにご自身が去って行かれるのだと明確に示しています。その考えは、イエスが語られた当時、すでに多くの「住まい」は存在していたものの、弟子たちのために新たな場所、あるいは状態が提供されるということでした。

「多くの住まい」という表現は、単に祝福と喜びが溢れかえる住処や状態を意味するに過ぎない。地球そのもの、そして私たちの最初の両親に象徴される完全な人間の生活の状態は、間違いなくこれらの「住まい」の一つであった。もちろん、この住まいは罪のために失われたが、後で見るように、神の定められた時に回復されることになっている。

聖書によれば、天使たちの存在には様々な次元がある。これらもまた、主が言及された多くの「住まい」の中に適切に含まれるだろう。創造主の霊的領

域に、どれほどの次元や生命の秩序が存在するかは我々に分からない。しかし、我々が物質界と呼ぶ領域に存在する生命の多様さから判断すれば、それは数多いに違いない。 しかし今や、「新しい創造」がもたらされようとしていた。すなわち、教会のために別の存在の次元が準備され、 用意されることとなった。それはイエスと共にいる場所であり、イエスが復活の時、高められた場所である。

教会の将来の立場

イエスは言われた、「わたしがいるところに、あなたがたもいるようになるためである」。 これは、主の忠実な信徒たちの将来の境遇が、主が栄光に上げられたのと同じ場所、すなわち同じ状態になることを示している。イエスの栄光について、使徒は次のように述べている。「それゆえ、神は彼を高く上げ、すべての名にまさる名を彼に与えられた。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、すべてのものがひざを屈めるためである。」フィリピの信徒への手紙 2:9,10

確かに、天の父は主を「神の御座の右の座」にまで、高く上げられました。 （ヘブル人への手紙12:2）。そして、この同じ高く上げられた地位が、教会のために「備えられている」のです。黙示録3:21にあるイエスの約束に注目してください。「克服者には、わたしも勝利を得て、父の御座に共に座しているように、わたしの御座に共に座することを許そう。」

キリストの復活によって、クリスチャンが「生き生きとした希望、……朽ちることなく、汚れなく、消え去ることのない、天にあなたがたのために備えられている御国」へと「新たに生まれ変わる」とペテロが言ったのも不思議ではありません。続く節にある使徒の言葉に注目してください。「あなたがたは、信仰によって、神の力に守られ、終わりの時に現される救いへと導かれているのです。」（ペテロの手紙一 1:5）

聖書で頻繁に言及される「終わりの時」あるいは「終わりの日」とは、キリストの再臨後の期間を指しています。これは、教理神学が教えるように、教会のために用意された天の相続財産（ ）が、何世紀にもわたって個々のクリスチャンが死の瞬間に受け取ってきたものではなく、イエスが再臨し、死者がよみがえる世の終わりに与えられる報いであることを意味します。 これは、主ご自身が弟子たちのために備える「場所」についてなされた約束と一致しています。「わたしは、あなたがたのために場所を備えに行く。もしわたしが行って……また戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎えるなら、わたしがいる所に、あなたがたもいるようになる。」これらの言葉から、主が「再び来られ」、彼らを「迎え」てくださるまでは、いかなるクリスチャンも主と共にいることを望むことはできないということが、いかに明白であるか。

使徒パウロも、次のように同じ事実を証言しています。「私は良い戦いを戦い終え、……信仰を守り

通しました。それゆえ、義の冠が私のために備えられています。それは、その日、義なる審判者である主が、私に与えてくださるものです。それは私だけでなく、主の現れを愛するすべての人にも与えられるのです。」 （テモテへの手紙第二 4:7,8）。ああ、そうです。使徒は、メシアの王国においてキリストと共に相続人となる者として与えられる天の報いが、イエスがすべての聖徒を御自身のもとに迎えに来られる世の終わりまで受け取れないことを、よく知っていたのです。

パウロの切なる願い

フィリピの信徒への手紙1章23節にあるパウロの言葉の誤訳により、ある人々は、使徒が死後すぐにイエスと共に天にいることを期待していたと信じ込まされてきました。 その箇所を引用する。「私は二つの願いの間で引き裂かれている。すなわち、キリストのもとに行くことを切望している。それは私にとってはるかに良いことだからである……」この文中の「行く（ ）」という語は、ギリシャ語の*「アナルサイ*（analusai*）」*に由来するものであり、明らかに「帰還する」と訳されるべきであり、ウィルソン教授もその著書*『エンファティック・ダイアグロット』*においてそのように訳している。

前の節で、使徒は、自分がまもなく処刑されるのか、それともローマ当局によって釈放され、しばらくの間宣教を続けることを許されるのか、確信が持てないと説明しています。彼にはこの二つの選択肢の間で選ぶ余地はありませんでした——「私は二つ

の間に引き裂かれている」。しかし、彼が非常に望んでいた第三の選択肢があり、それが「*アナルサイ*」でした。彼がこれを望んだのは、キリストと共にいられるためでした。

パウロは、主の「再臨」がなければキリストと共にいることはできないことを知っており、彼は単に、すべての真のクリスチャンの希望であるこの栄光に満ちた完結への切なる願いを表現していたに過ぎない。ウィルソン教授は、自身の*『エンファティック・ダイアグロット』*におけるこの箇所の脚注で、次のようにコメントしている。

「『*アナルサイ*』という言葉はルカ12章36節にも登場し、ここでは『帰還』と訳されている——『主人がいつ帰ってくるか待ち望む人々のようでありなさい』など。イエスは弟子たちに、ご自身が再び来られる、すなわち帰還されると教えておられた。……パウロはこの教義を信じ、他の人々に教え、天からの救い主を待ち望んでいた……いつの日か……主と共にいられるようになるのを。」

パウロは、死んだ瞬間に天国へ行くとは考えていなかった。彼に与えられた選択肢は二つしかなかった。一つは、もう少し長く生き、真理と兄弟たちに仕えること。もう一つは、 死によって眠りにつくことだった。 しかし、これらどちらよりも「はるかに良い」ことが一つあった。それはキリストと共にいることだった。だが、彼はそれがその時点では不可能であることを知っていた。彼は、キリストの「再臨」がまだ遠い未来のことであることを知っていた

。また、クリスチャンとしての報いは、最後の日の復活の時まで与えられないことも知っていた。テモテへの手紙第二 4:7,8

「この地上の住まい」

コリント人への第二の手紙5章1～9節にある使徒パウロの言葉は、クリスチャンが死ぬとすぐに天国に行くという意味だと誤解されることがある。しかし、この箇所は正しく理解すれば、そのようなことを教えているわけではない。 パウロはこう言っています。「この幕屋である私たちの地上の住まいが取り壊されても、神が造られた住まい、人の手によらない、天にある永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。」パウロは、この栄光に満ちた天のいのちの約束がイエスによってなされたことを知っていましたが、死の瞬間にそれを受けると期待していたのでしょうか。

明らかにそうではなかった。なぜなら、4節で彼は次のように続けているからだ。「それは、私たちが裸になるためではなく、着るものを受けるためであり、死が命に飲み込まれるためである。」 コリント人への第一の手紙15章51～55節において、パウロは、教会が不死の衣をまとうのは、「最後のラッパ」が鳴り響く復活の時までではないことを明確に示している。これは、キリストの再臨の後であることを示しており、この主題に関する他のすべての聖書の箇所と一致している。

コリント人への手紙第二5章8節で、パウロが「体から離れる」こと、そして「主と共にいる」ことについて語っているとき、彼は明らかに、この現世の生活（ ）と、墓の向こうにある復活後の生活とを対比させているのではなく、むしろ、クリスチャンがこの現世において直面し得る二つの状態について語っているのです。 一つは、主の御心を行うことへの忠実さによる主への近さという状態であり、もう一つは、主の教えの言葉を聞き従うことへの不忠実さによる、主からの相対的な疎外という状態である。パウロはこう言っている。「それゆえ、私たちは労苦し、たとえここにいても、いなくても、主から受け入れられる者となるようにしている。」 つまり、常に主との親密さを実感できているか、あるいは自らの不完全さゆえに時に主から遠く離れていると感じる時があろうとも、私たちクリスチャンは、最終的に主から受け入れられ、主から「よくやった」と称えられるよう、熱心に労苦すべきなのです。

「彼らの行いは彼らに付き従う」

黙示録14章13節は、世の終わりのごく限られた期間に適用される貴重な約束であり、福音の時代を通じて神がご自分の民に対処される方法を説明する一般的な声明として適切に用いることはできません。そこにはこう記されています。「書き記せ。これから先、主にあって死ぬ者は幸いである。そう、御霊が言われる。彼らは労苦から解き放たれ、安らぎを得る。そして、彼らの行いは彼らに随って行く。」

「今より」という表現は、この箇所を正しく理解するための鍵であり、この約束が特定の時点以降にのみ適用されることを示しています。 文脈から、ここで言及されている時期は、キリストの再臨後の時代の終わりにあることが示唆されています。すなわち、「収穫」と呼ばれる期間があり、その間、忠実な聖徒たちは、死によって地上の歩みを終えた際、死の眠りの中に留まる必要はなく、直ちに復活して、新しい王国の確立に関わる活動に参加することになるのです。

パウロはコリント人への第一の手紙15章51節、52節でこれに言及している。 「見よ、私はあなたがたに奥義を告げよう」と使徒は述べ、これから語ることは一般的な規則の例外であることを示しています。「私たちは皆、眠るわけではないが、皆、変えられる。一瞬のうちに、瞬く間に、最後のラッパの響きと共に。ラッパが鳴り響き、死者は朽ちないものとしてよみがえり、私たちは変えられるのである。」

確かに、すべての聖徒は死なねばなりません——「死に至るまで忠実」であり、「すべて」の者が変えられて不死をまとうのです。しかし、最後のラッパが鳴り響く時、死の中で「眠り」続ける必要のない者たちがいるでしょう。彼らは、主の奉仕における労苦を死によって終えるものの、即座に復活し、主のための働きをそのまま続けていくのです。 しかし、この死すべき身から不死への即時の変容でさえ、彼らが死を免れるからではなく、彼らの復活が死

の瞬間に訪れるからに他なりません。彼らは、教会の残りの者たちにとって必要であったように、主の再臨まで眠りの中で待つ必要はないのです。

「天に昇った者はいない」

イエスの初臨以前に、神の忠実な僕たちに天に関する約束は与えられていなかった。そして主ご自身が、その時まで誰も天に上ったことはなかったと明言されている。イエスの言葉を引用する。「天に上った者は、天から下って来た者、すなわち人の子以外にはいない。」（ヨハネ3:13）。イエスの使徒たちはこのことを明確に理解していた。なぜなら、ペテロは五旬節の日に、忠実な先祖ダビデについて語り、「ダビデは天に昇ったわけではない」と言ったからである。使徒2:34

神によって「移された」エノクは天に上げられたと多くの人が考えているが、そうではない。明らかに、エノクの「移され」とは、単に彼が死によってこの世から連れ去られたことを意味し、死に伴う苦痛の過程を自ら経験する必要はなかった。おそらく、他者が死ぬのを見るという辛い経験をする前に、彼は連れ去られたのだろう。記録によれば、彼は「死を見ない」ようにするために移されたのである。

パウロは『ヘブライ人への手紙』第11章において、エノクを過去の信仰者たちの中に含め、彼らについて「これらの人々はみな死んだ」と述べています（ヘブライ人への手紙11:5,13）。また、創世記5章24節には、エノクについて「彼はいなかった。神が

彼を連れ去られたからである」と記されています。これと類似した表現がエレミヤ書31章15節に見られ、そこではラケルの死んだ子供たちの状態を述べる際、「彼らはいなかった」と記されている。したがって、エノクの「移された」という概念に他にどのような意味が含まれていようとも、彼が天国へ行ったわけではないという証拠は説得力がある。

エリヤと戦車

エリヤは戦車に乗って天に上げられたと仮定する限り、彼は天にいるに違いないと主張する者もいる。しかし、記録によれば、その火の戦車は単にエリヤとエリシャを隔てたに過ぎない。エリヤを天へと昇らせたのは旋風であった。（列王記下2:11）。この点に関連して、聖書において「天」や「天々」という言葉は、しばしば地球を取り巻く大気圏（ ）を表すために用いられていることを忘れてはならない。そして、エリヤがその波乱に満ちた生涯を終える際、旋風によって連れ去られたのは、明らかにこの「天」へと向かうものであった。 創世記1:8,9,14,15,17,20; 7:11,23; ゼカリヤ書 2:6

変容の幻において弟子たちがエリヤとモーセを見たという事実は、この二人の預言者が当時、実際に天のどこかで生きていたことを意味するものではない。変容の山から下りてくる際、イエスは弟子たちにこう言われた。「人の子が死者の中からよみがえるまでは、この幻をだれにも話してはならない。」（マタイ17:9）。幻は現実ではない。ペテロは、天から布に包まれて降ろされる不浄な動物たちの幻を

見たが、それらは実在する動物ではなかった。パトモス島にいたヨハネは、二つの時代の壮大な歴史的パノラマの中で、生き物や無生物などあらゆるものが彼の前に現れる一連の幻を見たが、彼が見たもののどれ一つとして現実のものではなかった。 したがって、弟子たちはモーセとエリヤが現れる幻を見たが、その二人の預言者はすでに死の眠りについており、今日に至るまでそうであり、復活の時までそのままである。ヘブル人への手紙11:35,39,40

この変容の幻は、キリストが地上を治めるために確立されるキリストの王国に関するものでした。その時、天の栄光へと高められるすべての真のクリスチャンは、キリストと共に治めることになります。この統治の目的は、地上において人類全体に健康と命という祝福を与えることにあります。楽園が回復されるのは、まさにこの時代のことなのです。

第6章

楽園はどこにあるのか？

多くの人々は、「パラダイス」と「天国」という言葉を、あたかも同義語であるかのように使い、通常、この二つの用語は、罪と死に満ちたこの物質世界から遠く離れた、霊的な至福の状態や場所を指すものと考えられています。そして、すべての善良なクリスチャンは、死後すぐにこの場所に行くものとされています。 しかし、楽園と天国を区別し、前者は死後ほぼすべての人が入る一種の中間状態であり、そこで人々は将来の審判の日まで留まり、その時に永遠に続く至福の天国か、あるいは同様に終わりのない拷問の地獄のいずれかに移されるのだと主張する人々もいる。

聖書を注意深く研究すると、前述の見解は誤りであり、この誤解は、大いなる欺き手が「あなたがたは決して死なない」という最初の嘘を補強しようとする試みの、また一つの表れに過ぎないことが示されている。もし死者が死んでいるのであれば——聖書がこれほど明確に教えているように——死んだ者たちが、パラダイスであれ天国であれ、楽しんでいるなどということはあり得ない。

「パラダイス」という言葉は、文字通り「庭園」または「公園」を意味します。これは、罪のために人間が追放されたエデンの園に対して、適切かつ聖書的に用いられています。　エゼキエル書36章34節、35節において、預言者は、エデンの園の状態が地

上に回復されることを示しています。これは、使徒行伝3章20節、21節における使徒ペテロの証言によれば、神のすべての聖なる預言者たちの共通の宣言でもあります。ここでペテロは、地上の楽園の回復が成し遂げられる時期を「万物の回復の時」と呼んでいます（ ）。

使徒の言葉を注意深く確認すれば、「回復」の時期はキリストの再臨に続くものであることがわかります。「天は、万物の回復の時が来るまで、キリストを受け入れなければならないのです。」 もし楽園が、この地上における世界的な幸福と完全な状態であるならば、それはイエスの初臨の時には存在していなかっただけでなく、ペテロの言葉によれば、キリストが再臨して御国を確立するまで現実のものとはならないのである。

楽園の盗人

十字架上の盗人に与えた約束について、イエスは何を意味していたのでしょうか。イエスの「あなたは今日、私と共にパラダイスにいる」という言葉は、盗人の「主よ、あなたが御国に来られる時、私を思い出してください」という願いに対する答えです。 （ルカ23:42）。この盗人が、メシアの約束された王国について深く理解していたとは考えないほうがよい。彼がこのような願いを口にするのに、そのことについて詳しく知る必要はなかったのだ。 主の頭上に掲げられた銘板は、主が王であると主張していることをはっきりと示していた。当時、イエスが王としての権威を行使したり、誰かを助ける立場に

立ったりできるようには見えなかったが、その盗人は、この「犯罪者たる王」とされた方への敬意と承認を示すために、その御国への受け入れを願うことに何の害もないと考えたに違いない。

この盗人の親しみ深い仕草は、単なる願いから生まれたものであり、それが「 」という願いへとつながった。イエスはその願いを受け止め、それを生き生きとした輝かしい約束へと変えた。「あなたはパラダイスで私と共にいるだろう」。イエスのこの返答が、盗人の願いの妥当性を認める意図であったことは、イエスが「まことに」という言葉を用いたことからも示されている。つまり、あなたの願いは神の計画と調和しているのだ。 「私は王であり、王国を持つ。そして、あなたはその王国において記憶されるだろう――『あなたは私と共に楽園にいる』」

イエスがこの約束を盗人にした当時、イエスの王国はまだ確立されていなかったことは、イエスが弟子たちに「御国が来ますように。天におけるごとく、地にも御心が成りますように」と祈るよう教えたことからも明らかです。 （マタイ6:10）。この霊感を受けた祈りは、メシアの王国が当時まだ現実のものではなかったという事実を強調するだけでなく、私たちがすでに発見した考え、すなわち、それが到来するときはまさにこの地上においてであるという考えを裏付けています。

したがって、その盗人は地上の祝福を求め、イエスの答えもまた地上の祝福を約束するものでした。メシアの王国の統治下で回復される楽園というこれ

らの地上の祝福は、「回復」の時が到来した際、全人類が享受できるようになるでしょう。 しかしそれまでは、この親切な盗人をはじめ、墓の中にいるすべての人々は、約束された祝福を待たなければならない——死の眠りの中で待ち続け、人の子の声によって目覚めさせられる、この地の新しい日の朝が来るまで待たなければならないのである。ヨハネ5:28

では、十字架上の盗人に与えた約束の中で、イエスは「今日」という表現をどのように意味していたのでしょうか。 この箇所を、死者の状態に関する聖書の一般的な証言と調和させることにおける一見した難しさは、聖書のいくつかの翻訳におけるコンマの誤置によって引き起こされたものです。聖書の原典である霊感を受けた書物には、当時まだ句読点が発明されていなかったため、句読点が全く付けられていませんでした。 実際、句読点は比較的近代的なものであり、文学に導入されたのはわずか数百年前のことです。

聖書の翻訳者たちは、宗教界のほぼ全体と同様に、死の瞬間こそが天の至福へと移される瞬間であると信じていたため、自分たちの神学的教義と調和するように、この箇所にコンマを挿入した。このコンマの位置を変えるだけで、本文から本来の意味が読み取れるようになる。「まことに、今日、あなたに告げる。あなたはパラダイスでわたしと共にいるであろう。」 このようにして、主は、御自身に対する天の父の計画に対して抱いていた、揺るぎない確信を明らかにされたのである。

イエスの言葉にある「今日」とは、人間の視点から見れば、彼が王国を持つことなど到底不可能と思われた日であった。しかし、主の信仰は極めて強大であったため、あらゆる自然の状況が彼の希望に異議を唱えるような時でさえ、彼は完全な確信を持って、その盗人に、確かにメシアの王国が到来すること——楽園が回復され、彼もそこにいてその祝福を享受する機会を得ること——を断固として保証することができたのである。

パラダイスに引き上げられたパウロ

コリントの信徒への手紙二12章1〜4節で、パウロは自分が「パラダイスへと引き上げられた」という幻について語っている。使徒が説明しているように、これは「幻」であり、当時パラダイスが実際に存在していたことを全く意味するものではない。使徒は、この同じ幻の中で、自分が「第三の天」へと引き上げられたことも説明している。この情報は、幻全体の意味を理解するための鍵となる。

使徒ペテロは、第二の手紙第3章において、パウロが幻の中で見たこの「第三の天」について語っています。実際、ペテロは単に「第三の天」だけでなく、三つの「天」すべてについて言及しています。彼は、これらの天のうち最初のものはノアの時代の洪水以前に存在し、洪水の際に滅ぼされたと説明しています。また、第二の天は洪水の際に現れ、キリストの再臨後に滅ぼされることになると述べています。「それにもかかわらず」と使徒は続け、「私た

ちは、神の約束に従って、義が住む新しい天と新しい地を待ち望んでいるのです。」

私たちが待ち望むこの「新しい天」は、つまり「第三の天」ということになる。ペテロは「新しい地」についても語っている。 パウロが幻の中で「楽園」と描写しているのは、まさにこの「新しい地」のことである。さて、ペテロは、新しい、すなわち「第三の」天と、新しい、すなわち「楽園」としての地とが、いずれもキリストの再臨後に創造され、あるいは現存することになることを明らかにしている。これは、楽園はまだ存在しておらず、したがって死の瞬間に誰も楽園に行くことはできないという、我々のこれまでの見解を裏付けるものである。

「楽園」の地における祝福

ペテロは、私たちが「その約束に従って」『新しい天と新しい地』を待ち望んでいると述べています。 使徒が明らかに言及している「約束」とは、イザヤ書65章17節から25節のものです。この約束に関連する際立った事実の一つは、本文を読めばわかるように、「新しい地」の創造と共に「喜び」がもたらされ、「泣き」が終わり、 もはや「生後間もない乳児」がいなくなること；家を建てる者が「そこに住む」という経済的安定；「彼らはむなしく労せず、苦難を生じさせない」こと；彼らが呼ぶ前に主が「答えてくださる」こと；「狼と子羊が共に食う」こと；そして最後に、すべてを包括する約束、「わた

しの聖なる山［王国］において、彼らは傷つけず、滅ぼさない、と主は言われる」ということです。

これは聖書における栄光に満ちた王国の約束の一つであり、ここでの「山」という言葉は神の王国を象徴するために用いられている。それはダニエル書2章35節、44節、45節に描かれている山であり、成長して全地を満たすものである。それは十字架上の盗人が記憶される王国であり、全世界に楽園の状態を回復させる王国である。 この預言のどこにも、それが天の祝福の約束であることを示すものはなく、すべて地上のことである。

『ヨハネの黙示録』21章1～4節にも、同じ「新しい天と新しい地」について言及されており、その確立に伴って約束された祝福も同様です。なんと素晴らしく、広範囲にわたる祝福でしょうか！ そこにはこう記されています。「神は彼らの目からすべての涙をぬぐい去られる。もはや死もなく、悲しみも、叫びも、 痛みも、もはやない。以前のものはすべて過ぎ去ったからである。」

イザヤもヨハネも、「新しい天」と「新しい地」を「新しいエルサレム」と結びつけています。パウロはガラテヤ人への手紙4章26節において、教会をこの天のエルサレムに属する者たちであると特定しています。教会はまたキリストの「花嫁」とも呼ばれており、ヨハネの黙示録21章9節、10節では、この「花嫁」こそがまさに「新しいエルサレム」であることが示されています。 したがって、新しい天と新しい地が最終的に確立される時、教会という群れ

はすでに完成しており、この新しい王国の秩序において、主イエスと共に共同相続人として主と共にいることになるのです。

そして、主の花嫁として、彼らは、その時に備えられる命の泉に耳を傾け、そこに来るすべての人々に命を回復させるという祝福された働きに加わることになります。「御霊（私たちの主イエス）と花嫁は、『来なさい』と言われます。……望む者はだれでも、命の水を無料で受けなさい。」　（黙示録22:17）。この命の水は、神と小羊の御座の下から流れ出ることが示されています。これは、その時に与えられる命の祝福が、新しい王国の統治規定、すなわち「御座」に従うものであり、また、屠られた小羊の贖いの御業によって、それを望むすべての人に無償で与えられることを告げる、美しく統合された象徴です。黙示録22:1

「天」と「地」も、もちろん象徴的である。聖書は、これらが新しい王国の二つの段階を表していると示している。一つは、主にイエスと、その栄光に包まれた教会から成る天の段階であり、彼らは王国の霊的かつ目に見えない統治者となる。もう一つは、主に復活した古代の預言者や過去の他の義人たちから成る地上の段階であり、彼らは「全地の君たち」となるのである。 詩篇45:16

イエスは、「あなたがたは、神の国でアブラハム、イサク、ヤコブ、そしてすべての預言者たちを見るだろう」と言われました。そして確かに、彼らは死者の中から復活し、完全な人間の命に回復される

でしょう。そして、神のキリストを代表するこれらの完全な「政治家」たちが、人類の世界と直接関わるようになるのです。 そう、それは真の王国であり、それが確立されるとき、嘆き苦しむ全被造物に対して、真のいのちの祝福がもたらされることになる。

これこそが、聖書が私たちに差し伸べる希望であり、困難な時の慰めと支えとなるものである。すべての忠実なクリスチャンには、イエスの王国における共同相続人としての栄光、誉れ、そして不死が与えられ、また、メシアの王国が確立された際、その律法に従い「いのちの水を無償で」受け入れるその他すべての人類には、地上の楽園における回復された人間の命が与えられるのである。

王国の祝福

「御国が来ますように。天におけるごとく、地においても御心が成りますように」という祈りに応えて、この神の御国が、罪に病んだ世界にどのような栄光に満ちた祝福の時をもたらすことか！ まさに、それは新しい時代となるでしょう。 過去における一つの時代から別の時代への変化は、いずれも顕著で際立ったものでしたが、今回の変化は、世界の支配権が、サタンの死の支配からメシアの命の支配へと、また、偽りの神々への迷信的な崇拝から、真の神であるエホバとその御子であり、世界の贖い主であり命の与え主であるキリストへの知性ある崇拝へと移ることを意味するため、これまでで最も傑出しており、波乱に満ちたものとなるでしょう。

このような広範囲にわたる変化を思うだけで、信仰にとって圧倒的なものとなるでしょう。しかし、それらが全能の神、すなわち宇宙の創造主によって約束され、計画されているという認識がなければ、そうはならないでしょう。神は、当初生命を創造されたのと同様に、御子を通して死者を生き返らせることも十分にできるお方なのです。 そして、なんと壮観な光景であろうか――全人類が、口と心に永遠の喜びの歌をたたえて、神のもとへ、そして命へと帰ってくるのだ！ああ、その通り、「彼らは喜びと楽しみを得、悲しみと嘆きは逃げ去る」のである。イザヤ書35章10節

今、悲しみと嘆きは私たちの存在と切り離せないもののように思えますが、神の約束によれば、それらは「消え去る」のです。罪、病気、そして死は、この世のあらゆる悲しみの原因であり、人類のこれらの「敵」は、メシアの御国の力によって滅ぼされるのです。 このように、罪と死の支配という長い夜の間、荒布をまとい灰をまいて泣く日々が続いてきましたが、まもなく夜明けとなる千年王国の朝には、うめき声を上げる被造物を喜びが待っています。その時、すべての顔から涙はぬぐい去られ、灰の代わりに美しさが与えられ、重苦しい心の代わりに喜びの油が注がれるのです。

イザヤ書25章6～9節において、預言者は、楽園の状態が全世界に回復される新しい王国の預言的な描写を私たちに与えており、この預言の一部（ ）は、その時、神が「勝利をもって死を滅ぼし尽くす」と

宣言している。　コリント人への第一の手紙15章54節で、使徒パウロはこの約束を引用し、教会が主と共に不死へと高められる後に、それが成就すると説明しています。王国の祝福に関する最初の約束の一つはアブラハムに与えられたもので、神は彼に、彼の子孫を通して地上のすべての家族が祝福されると告げられました。

ガラテヤ人への手紙3章8節、16節、および27-29節で、パウロは、アブラハムに与えられた約束の成就が、キリストと、この時代のキリストの忠実な歩みを追う者たちである、栄光に包まれた教会を通して実現すると説明しています。 したがって、これが、なぜ楽園のような生活と幸福の状態がまだ地上に回復されていないのかという理由である。すなわち、キリストの天の住まいを分かち合い、世界に命の祝福を授けることにおいてキリストと共に共同相続人となるべき、この時代のキリストの追随者たちは、まず第一に、御国におけるその高い地位のために選ばれ、備えられなければならないからである。

時代の兆しは、私たちがまさにこの時代の終わりに生きており、キリストの教会を選り分ける御業がほぼ完了しつつあることを、疑いの余地なく示しています。これは、この世の祝福に満ちた黄金時代の「甘美な未来」が今や近づきつつあり、まもなく涙の暗い夜が歌の朝へと変わることを意味しています。 もはや葬儀が日常の光景ではなく、その代わりに、かつて愛されながらも死によって一時的に失われた友人や親族との幸せな再会が訪れる時、それはな

んと喜ばしい時であろうか。その再会は、その時、その神の王国の律法に従い、従順を通じて神聖なるキリストとその栄光に包まれた花嫁の、 な回復の力に与る者たちすべてにとって、永遠のものとなるであろう。黙示録22:17

贖われた人々のうち、いかなる者も、神の王国の全能にして祝福された働きを通して、神の恵みが及ばないほどに堕落することはない。 罪による堕落がどれほど深くとも、憐れみの御手がその深淵を測り、血によって贖われた魂を救い出すのに十分である。無知と迷信による闇が、いかなる心においてもどれほど濃くとも、神の真理と愛の光はその暗闇を貫き、新しい日の喜びと歓びの知識をもたらし、従順を通じてその祝福に与る機会を与える。 肉体を襲い汚染するいかなる病も、偉大なる医師の迅速な御手による支配の及ばないものはない。また、いかなる身体的欠陥や精神疾患も、その癒しの御手に抗うことはできない。

しかし、これが、新しい王国の律法への従順にかかわらず、すべての個人に対する普遍的な和解と救いを意味するのだと、誰も一瞬たりとも考えてはならない。なぜなら、聖書は、そのような無条件の救いを教えているわけではないからである。 使徒行伝3章20～23節において、使徒は、神がすべての聖なる預言者たちの口を通して約束された回復の時が来ることを告げているが、個人がそれらの祝福を受けるかどうかは、「その預言者」、すなわち神の御子キリストへの従順にかかっていることを明確にして

いる。彼はこう述べている。「その預言者の言葉を聞かない者は、民の中から滅ぼされるであろう。」

パウロは、キリストについて聞いたことがない者が、どうしてキリストを信じることができるのかという問いを提起しました。実際、 無知のままで救われることも、滅びることもありません。聖書は、啓示者が「第二の死」と描写する状態において、真理に対する明確な知識を通じて、信じる機会と従う機会を十分に与えられるまでは、誰も滅ぼされることはない、と教えています。この目的を達成するために、神の計画は、死の眠りについているすべての者の目覚めを定めています。 この目覚めについて、パウロはテモテへの手紙第一2章3節、4節で言及しており、すべての人が「救われる」ことが神の御心であると述べている。ここでいう「救われる」とは、永遠に救われることではなく、真理、とりわけ、彼らの贖い主となるために神が御子を賜ったという真理を知るに至るために、死の眠りから救い出されることを意味する。 しかし、永遠の命は、啓示を受けた時に彼を「信じる」者たちのみが享受する幸いな分与となる。神の恵みのこの制限は、ヨハネの福音書3章16節に明確に記されている。「神は、その独り子をお与えになるほど、世を愛された。それは、彼を信じる者が一人として滅びることなく、永遠の命を得るためである。」

真理の純粋なメッセージが全地を覆う千年期において、どれほど多くの人々が、あるいはどれほど少数の人々が神の恵みを拒むかについて、私たちが推

測することはできません。現在の状況は、それを判断するための基準を私たちに与えてはいないのです。なぜなら、今の世界は、大いなる欺き手であるサタンの欺瞞的な影響によって目がくらまされているからです。 教会の鐘の音が聞こえる範囲に住む者すべてが、キリストについて知り、彼を信じる公正な機会を持っていると考えるのは誤りである。なぜなら、あまりにも多くの相反する教会の鐘が鳴り響いているからだ。彼ら自身、何が真理を構成するかという点で絶望的に分裂している。もし盲人が盲人を導くなら、両者が混乱と疑いの溝に落ち込む以外に、どのような を期待できようか。まさにその通りである。

しかし、十字架上の強盗が「私を覚えておいてください」と願ったその王国の時代のまさに始まりに、人類の最大の欺き手であるサタンは縛られることになる。 （黙示録20:1,2）。預言者は、メシアの権力の到来を太陽の昇りに例えており、この地上の新しい王は「義の太陽」と呼ばれ、健康と生命を与える力を携えて昇り、闇と迷信の霧を払いのけ、神の愛という真の福音をもって世界を照らすことになる。マラキ書4:2

その時こそ、すべての人々が、メシアの王国において具現される神の義の原則への忠誠を証明する真の機会を与えられ、その回復された地上の楽園に永遠に住む特権を得る時となる。聖書によれば、信じず従わない者は、「民の中から滅ぼされる」ことになる。使徒行伝3:23

こうして、神の王国は到来し、天においてなされているように、地においても神の御心がなされることになる。こうして、キリストは、すべての敵対する権威と力を打ち倒し、すべての膝を屈めさせ、すべての舌に父なる神の知恵、正義、愛、そして力を告白させるまで、父の代理者として統治されるのである。